
異世界の勇者、異世界の英霊

ヒルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の勇者、異世界の英霊

【Nコード】

N9859H

【作者名】

ヒルト

【あらすじ】

□私は疲れ果てていた。理想を追い、裏切られ、尚も求めてすり減らしていった心と記憶。”座”に着き、齎されてくる結果の記録は求めたモノの全く真逆という、そんな暗夜を漂う中でまた”世界”に喚ばれ、本来の守護者としての役割を淡々と果たそうとして降り立った地は：自分にとって”全く馴染み無く”、”知らない”世界だった。□□□わたしは、二つの相反したものに押されて勇者となった。そして、勇者と讃えられた父の背を絶対に生きていると信じて追いながら、二人の仲間と共に出た魔王討伐の旅。次の大陸

への足掛かりを確実にしたところでわたし達三人は彼に出逢った。

邂逅（前書き）

初めましての方、お久しぶりの方諸々を含めまして、どうもヒルトです。

DQ3ネタにFateのアーチャーを放り込みました。

いや。おめ、”キョン子”放っぽって何新しいの投稿してんの？とか思われるのも仕方ないんですけど…あれ、そこそこキリが良
いし、

あのまま完結でいいかな…って…

で、ですので、こりはこりで”キョン子”は別に考えて評価して
いただけたら、と。

お、怒らないで下さい。分かってるんですけど、ね。多分、こ
れも船手に入れる辺りまで行けたらなあとは思ってますけど…ね。
まず、書き始めたんで頑張りますので宜しく願いします（礼

邂逅

「…む？」

いい加減に慣れた世界からの呼び出しに応じ、現界してみたのだが…

「…ただの森、だな」

木々が生い茂るのみで速やかに近くを探ってみるが、特に気配も何もない。

今回は守護者本来の仕事をやらせるために呼ばれた筈なのだが、何処をどう見ても人類が危機に瀕しているようには見えなかった…まさか、

「…手違いか？」

それこそ、まさかだと鼻で笑いつつ、感覚を広げていき辺りを探るのを再開する。と、同時に世界から現状の情報を超越すよう意識を飛ばす。が、

「判りづらいな……む？ ルビス？ 魔王？ 何だこの情報は？！」

ヒドく虫食いされた情報が送られてきて柄にもなく戸惑う。

滞りなく送られてくるはずの情報はノイズと途切れ途切れの連続でしかなく、あまりに不完全なままに…

「…っな？」

切れた。

「…ど、」

文字通り、世界との繋がりが。

「…どういう、事だっ？」

平静を保とうとするが、世界から何も来る気配はない。

有り得るはずのないこの状況に内心とともに表情も狼狽を隠しきれず狼狽えてしまう。

「…ツチ。くそっ、いったい何がどうなっているのかがサッパリだっ…！」

手違いのような世界の召喚、切れてしまった世界とのつながり…悪態をつくなどというほうが無理だった。が、口にして当面の目標は明白になった。

「…情報が要る、な」

正味、事態は全く軽くはないが世界…”座”から外れたなら、外れたで清々したのは否めない。

結局、

全てを、一も欠くことなく助けるなど理想でしかないのだから。

疲れていた…何もかもに、どうしようもなく。

全てを助ける為に世界と契約し、守護者になっても多くの人々を助ける為に一を切り捨てなければいけなかった…なら、

「何の未練も…ん？」

ふと、広げていた感覚が何かを知覚した。

察知した方を見やり、感覚をその一点に集中する。

「…ふむ」

気配は多数…片方、三つは恐らくは人。だが、

「む…？」

残った気配はまさしく異様…そして、研ぎ澄ませた感覚が闘争の気配と放たれている確かな悪意、それに混じった血の臭いに反応する。

「…見過ごすなんて出来ないよな」

地を駆って木の一つへと跳躍、その木の先端に降り立つと視力を強化してその先を視認し、

「……あれは妖魔、魔獣の類かつ？」

その異様に思わず目を見張った。

明らかに生態系に属さない生物が人を襲っていた。

強化した視界はその者達の姿をしっかりと認め、応戦する様を見る。

相手は…水色の固形生物に同じ色の水母属生物、緑色の流体生物、

大人程に巨大化したアリクイ、二足歩行の巨大蛙、顔に羽が生えたような怪蝶…そして、人の気配を感じない全身鎧に包んだ人型。それらが大挙として三人の人間に襲いかかってくる…明らかな多勢に無勢。

「…くっ」

感覚が昂る。

明らかに人とは違う存在、明確な害意、何のしがらみも感じさせない…白地な”悪”そのもの。

くすぶり、擦り切れていたモノが鎌首を擡げる…” ■ ■ の ■ ■ になる” という誓いが。

「…か…ん係、ない」

もう、その誓いは関係ない…ないんだ。だから、

トレース、オン

「――” 投影、開始 ”」

ただ単に襲われている三人に加勢する。

何の感慨も無く、ただ”守護者”として呼ばれた以上、その責務を全うするために。

…

「っ、はあっ…はっ…っああああ…！」

襲いかかってきた一体の才オアリクイを一刀に斬り伏せて油断無く、更に後詰めが無いかに注意を向ける。

「洒落臭い…いい加減、失せなさいつてのよ《バギ》っ！」

その横で仲間の一人…武道家のユニが攻撃魔法を唱え、その武道家とは思えない華奢な手から風の刃を放ち、敵を薙払う。

本来なら武道家という職種は魔法を使えないのだが、彼女は武道家に至るまでかなりの紆余曲折があり、元は僧侶だったらしいのだが、何故か魔法使いへと転向して果てが今の武道家としての自分に落ち着いた、は本人の弁。

レベルはわたし達より高いのに面白そうの一言で固定パーティーを契約し

「アルス危ない！ 《メラ》」

「へっ？ うわわっ？！」

その声到我に返ると同時に、放たれた拳大の火球に慌ててしゃがみ込んで難を逃れる事に成功し、体当たりを咬まそうとしたフロツガーが焼け飛ぶのを見送る。

「こんな大群に囲まれてるのに余裕綽々ねっ”勇者様”！」

頭ごなしに”勇者”と言われ、反射的にムスツとしながら仰ぐと最後の仲間…魔法使いのアーリアが腰に手を当てて見下ろしていた。魔法使いのアーリア、小さい頃からの幼なじみ。数少ない、わたしをちゃんと見てくれる親友。

「…アールリアこそ、余裕じゃないのさつ。そっちスライムとか一角ウサギが多いから任せたハズでしょっ？」

「ああ、今は小康状態だから大丈夫…こっちの様子窺ってやがんだよ」

ユニの言葉に目を向けると敵の群れは剣の間合いから大きく外れ、魔法戦の間合いに陣取っていた。

「…漸く、次の大陸に行くつてのに」

ロマリアへと至る洞窟は壁で塞がれており、番兵から通行証代わりに”魔法の玉”という爆弾を持つてくるよう提示され、かなりの時間を掛けて漸くの所で爆弾を手に入れて壁を壊し、レーベで一泊休んだあと洞窟へと向かう道中でこの事態に遭遇した。

「逃げ道は…」

「ないわね。しかし、今日は厄日！？ 普段あんまり群れないクセに群れに群れて、何か変な動く甲冑なんかまで居るわ甲冑がスライム擬き喚ぶわ、そいつが《ホイミ》なんか唱えるわで全然数減らないしいっ！！」

ユニがたまらず、うがぁーと叫ぶ。

確かに彼女の言う通りにこれは変だった。普段群れないとは言え、最低でも二丁三匹は群れる。が、十数匹で群れて襲いかかってくるなんて前例や目撃証言がない。

「…やっぱりあの、甲冑が原因かしら」

「…文献で見た。あれ確か”さまよう鎧”っていう魔物でロマリア

近辺には良く出現するって」

「で…ここまで出張って来た、と？ あとであの番兵一発殴る」

物騒なユニの言葉は流しつつ、視線を奥へと向ける。

群れの奥に、その”さまよう鎧”は居た。

全身を覆う鉄鎧と顔まで守る鉄兜、そして恐らくは鋼鉄製の長剣…その出で立ちは、このアリアハン周辺に現れる魔物とは一線を喫した威圧感を放っていた。

それが原因か、当てられている他の魔物達はかなり殺気立っている。今になって、

「はあ…」

壁を壊した後、番兵に翌日に来ると言った時のあまり良い顔をしなかった理由が判った。

「…正直、早く何とかしないとマズいわね。長期戦はこっちが不利になる」

「ユニ、アリア。精神力は持ちそう？」

「もう《ギラ》や《バギ》みたいな範囲魔法は無理っ」

状況は、

「そうね。《メラ》に変えれば多少、ほんの少しだけ多目には撃てるかしら」

芳しくない。

こつちもあと《ホイミ》を数回分…攻撃魔法に回したいがユニが範囲魔法を使えるだけに率先して回復役に回ったのだが、

「…分が悪い」

「最悪、囲みの薄い所から逃げるしかない…ごめん、わたしの判断ミスでこん」

「ちよい待ち、さまよう鎧の様子が変よ」

「え？」

言われてから、いつの間にか目線が地面に下がっていた事に今更気付き、慌てて視線を上げると”さまよう鎧”がその兜を見上げ、横を向い

「っ！？」

「「っ？！」」

突如として走る悪寒。

二人も同様に感じたらしく、未だに魔物は目の前にいて緊張状態だというのに”さまよう鎧”が見上げる方向に意識を向け、

フリーズアウト

「—— 停止 解凍 ——」

予期していない第三者の声と共に…赤い衣を身に纏い宙を舞う青年を。そして、

ソードバレル フルオープン

「—— 全 投 影 連 続 層 射 ——」

その言葉が何の宣言かは判らない…が、結果として目を疑うような大量の槍や刀剣の群れをその視界に捉えていた。

「…」

「滅茶苦茶だな」

ユニが言う通り、圧倒…いや、これはもう一方的な蹂躪と言っても良かった。

大地に突き刺さっていく剣、細剣、長剣、大剣、短槍、長槍、斧槍…大凡、突き刺すという目的に特化した武器が何の躊躇いもなく目の前で敵を貫いていく。

「あ…」

啞然としている中で視界が何かに塞がれる。

木の高さから大地に立つその合間がヒドく長く感じたが、自分達のすぐ前に着地した青年…目の前の惨状を創り出した張本人はまるで魔物から守る壁のように背を向けて前を見据えていた。

「…」

「…」

黙して語らないその背中…それはまるで、もう記憶の隅にしか残っていない父の背中の中の面影と重なる。

「…え、と」

「ばかアルスっ、ぶっ殺されるってばっ！」
「うんうん」

元・僧侶とは思えないユニの言葉にアーリアが首肯してる。けど、そんな存在には思えなかった。

「…怪我は無いか？」

前を見据えたまま、重みのある声色にこちらを気遣うものが含まれているのを感じた。

「…お、お、御陰様で特にはっわ?!」

と、礼を述べようとした瞬間、何かを振りかぶり抜いた姿勢で止まる。その数瞬、

「あ」

遠くの方に聞こえてくる、大きな金属音と数回の小さな金属音。

「…これで此処にいた魔物は殲滅出来たな」

その言葉で先の音は”さまよう鎧”の断末魔なのだと気付いた。圧倒的な存在感…それは即ち、自分達とは比べ物にならない程のレベルだと察する。

「…改めて訊くが、怪我は無いか？」

「は、はい！ ゆ、ユニもアーリアもどう？」

「《ホイミ》」

「ありがと、ユニ。今、無傷になったわ」

言ってアーリアがこちらに治した手を振り、

「ああゝもお精神力は空っ欠ー。微風も出ないわ」

肩を下ろすユニが盛大に溜め息を着いた。

「大丈夫です！」

「…」

「…？ あの…」

向き直ると何故か啞然とこちらを見やっている、絶対的強者の青年。

彼はしばらくこっち…ユニの手？ を見た後、何か疲れた表情で空を見やったかと思うと、次には何か諦めにも似た微苦笑を浮かべて自分達を見やる…

「…実は”此处”に来たばかりでな、色々と言いたい事があるんだが、いいかな？」

「え、えと…」

驚いた。

こちらを見やるその表情はすぐ前に広がる状況を創った人とは思えない程にあまりの差があった。

改めてその青年を見やる…こつも近いとヒドく見仰がなければいけない背はスゴく高く、三人の中で一番背が高くて頭二つ程は足りないかもしれない。

浅黒い肌に白髪はこの辺りでは人目を惹き、鉄色の瞳は歴戦の戦士のそれでルイードの酒場に屯う冒険者など齒牙にも掛けない、経験値の高さが見えて目を離せなかった。

「…えと」

緊張する…まるで王様と話すような感じだ。

「あ」

「御名をお聞きしても宜しいでしょうかっ!？」

何とか、何かを言おうとした所でアーリアが言葉を重ねてきた。

「「アーリア?」」

ユニも戸惑い、名を訊かれた彼も戸惑っている。

「名…か。どうしたものか、な」

可笑い。

アーリアは異性に対して人見知りしたはず。全く積極的ではないはずなのにこの、急な意気込みようはなんなのだろう？

「…ふむ、名…そうだな」

「は、はい、是非!」

「とりあえ、ず…っ?」

「どうしましたっ?!」

「今度は何よーっ？」

ユニが状況が目まぐるし過ぎてついて行けてない…かく言つ、自分もだけど。

彼は突然、言葉に詰まったかと思うと片膝を着いてしまい、地に両手を着いてしまう。

「……は？ 何、をっ…ちょっと待てっ！」

戸惑い、声を荒らげ空を見上げかと思えば…

「っぬ、ぐっ…ぐ…っっ」

何か、耐えるように胸を抑える。

「あ、あれ？」

目の前で彼の存在感が目に見えて弱くなり、今まで感じた事なかった圧迫感は薄れていき、威圧感も小さくなっていく。

目を凝らすと、彼の身体に何重もの鎖らしきものがその身に巻き付いていくのが見えた…ような気がした。

「……訊き、たい」

息も絶え絶え、としか言えない。

ついさっきまでの圧倒的な存在感が形をひそめさせる程の”何か”だ、当たり前だ。

「な、何でしょう？」

「精霊ルビスとやらに聞き覚えはあるか？」

…精霊ルビス？

聴いた事がない…この世界は神様を信仰しているが精霊と言う名でルビスというのは聞いたことない名だ。

それを彼に伝えると、

「…ツチ。事はそう、単純ではないか。はあ…どうやら、”この世界”は私…の、”力”がお気に召さない…ら、し…い」

と、何だか憎々しげに言っただけだ。

どういふ事だろうかと訝しむ内、

「…チツ…地、獄に堕ちろ、ルビス…」

そんな物騒な言葉を吐き捨てながら、彼は横に倒れて気絶してしまった。

「…」

「…」

わたし達三人に訪れる沈黙。

「…えと。ど、どうしようか？」

「勿論、彼を放ってはいけないわ！」

沈黙を破ったユニの問いにそう言っただけのけるアリア。
見ず知らずの彼に何でそこまで執心？

「まあ、アーリアに賛成かなあ。助けてもらっだし」

これで二票。

「…じゃあ、わたしも三票目を入れるしかないね」

とりあえず、この場に長居は無用…と、言いたいが彼を運ぶには女三人には酷過ぎる。

軽装で”何故か”何も持っていないらしい、彼はその身だけでも重そうなのが見て取れる。なら、

「勿体無いけど、虎の子のキメラの翼でアーリアハンに戻るしかないわね」

「え、何アルスお持ち帰り？　わたしも泊まる！」

意味は分からないけど、アーリアにはとりあえず早まらないでほしい。

「ルイーダさんトコに部屋借りて様子を見るのよ」

「えー…お金掛からない？」

「それは交渉次第だと思う」

荷物らしい荷物が無い…なら、予想が当たっていれば、

「…この人、冒険の書持ってないかも」

「「えっ」」

「ちよつ、この人、” あれ ” でモグリだったの？」

あの強さを目の当たりにしたら信じられないが、

「だから、この人みたいな強い冒険者を登録させればルイーダさんのトコも箔が付く」

「なるほど…それが交渉の手札ね」

「確かに、冒険者なら肌身離さず持っているはずの冒険の書…持っている気配ないかも。うん、アルスの案いいかも」

ユニが納得し、アーリアが肯定した。

あとは行動するのみ。

「…とりあえず、行こ。あまりここに長居しないほうがいいだろうし」

二人に向き直ると互いに頷き合う。

「んじゃまつ、ヨイシヨつと重つ！」

「あ、わたしもつ、んしょ！」

ユニが倒れる彼に肩を差し入れ、持ち上げるのを見てアーリアが反対側を支えた…んだけど、二人が彼を支えるも明らかに寸足らずで膝が地面に着きかけてるのはこの際、気付かなかった事にする。

「じゃあ、二人とも掴まってね」

二人が掴まるのを確認するとキメラの翼を掲げる。
地から足が浮くを感じると同時にその場から勢い良く離れ、目
的地であるアリアハンへと飛んだ。

アルス（前書き）

設定や背景は捏造とDQ3プレイ時のうる覚えな知識と記憶です。

現時点でのステータスの状態や成長補正とか、魔法習得速度に關してもそこに捏造もイイトコなので細かいツツコミは無しの方
向で！

あとイベントによってはかなりダークなものが入ります。何故なら、実際にそんな状況だったならもつと副次的なモノ…被害とかが色々と無ければ可笑しいよなというモノで書いていきますので心積もりだけはしておいて下さい。では！（礼

アルス

『貴方の力はあまりに大きすぎる。速やかにその力を封印します』

「……は？ 何、をっ… ちょっと待てっ！」

という風に、突然の念話でそう告げられた言葉はあまりに不可解であり、結果として力は封印され、意識を失うに至ったわけだが。

『…少し強引ではありません』

目覚めていない状態で聴こえてくる、声ではない声。

どうやら直接、意識に働きかける念話のようだ。しかし、改めて振り返ってはみたが大凡、納得出来るモノではない。

…遣りようはあったらうに。

『ですが、だからと言って地獄に堕ちろとは穏やかではありません』

…喚び出しておいてこの仕打ちだ、安いモノでは？

『…”呼びかけ”は必要な事だったのです。結果、”それ”が喚び出す切っ掛けともなった。ですが、強大過ぎた。その封印は高く付いたのに、それでも貴方の力を完全に目立たなくするには至らなかった…無念です』

…理由は話してもらえるのだろうか？

『勿論です』

…なら、聞かせてもらおう。

『全ては、この世界に生きる人々の為…この世界の危機はこの世界に生きる人々の手によって救われなければならない。わたしは世界に呼びかけ、呼びかけ続けた』

…それで私が喚ばれた。

『本来ならこのような事は…』

…何故、呼びかけた？

『勇者である彼女の運命があまりに過酷なモノを差したのが理由です。唯でさえ道無き道を進まなければいけない旅を三人ではあまりに』

…そこまで思うならルビス、君が直接

『…わたしは既に、大魔王によって囚われの身という事もあります。が、やはり直接関わっては人々の為にはならないのも事実なのです…本来なら干渉を最小限に世界全体の運命に働きかけ、自然な形に最後の一人を誕生させるつもりでした。なのに…』

…結果が私か。

『最初は結果としては仕方無しと思いました。が、貴方の力は剩りにも強大過ぎた。その力が人々が知れば己の力からの解決から外

れてしまう。そして、その強大過ぎる力は大魔王に気付かれ、精強
な魔物を大群で仕向けるでしょう…最悪、それに巻き込まれた大成
していない勇者はその命を落とし、世界は闇に包まれてしまう』

…私がそのまま、その大魔王とやらを倒せば

『この世界はそれを望んではいません！』

…なら、今すぐにでも私を在るべき場所に戻し、本来の目的を
行すれば良からう？

『…私も本当ならそうしたい所ですが、代償は高く付いたと先ほど
申したはずです』

…それは、

『わたしにはもう、その最小限ですら世界に干渉する事も出来ませ
ん』

…私が悪いのか？

『…』

…判った、悪かった悪かったから。そんな、思念で泣きを表現し
ようとするな。

『……わたしの残った力を全て注いでも貴方の力を封印するには
至りませんでした。ですが、その殆どは封じたつもりです』

…で、力を封じられた私は今後、どうすればいい？

『彼女…勇者アルス達と共に大魔王への旅路を歩んでいただきます』

…それは矛盾していないか？

『背に腹は変えられません』

…了解した。しかし、私の力は封印されてしまっている訳だが、それはどうなる？

『貴方はこの世界に喚ばれた以上、その法則に従います。つまり、旅路の中で魔物を倒す度にその力の封印は解かれていくでしょう』

…元の力まで戻るのが心配だな。

『心配無用です。遅くとも大魔王の領域の中でその力は完全に解放されるでしょう…そして、その頃には勇者やその周りも大魔王を對抗しうるだけの技量を持ちます。貴方の傍らに立ち、共に剣を、魔法を振るえる程に』

…私が遣るべき事は？

『大魔王の事はいずれ至ります。その事は伏せたまま、共に歩み…時には導き…そして、支えてください。心身共に彼女が、真の勇者と成れるよう』

…真の勇者、か。

『どうしました？』

…その全幅の信頼には応えられないかもしれない。

『そんなっ、何故です!?!』

…自分で言うのも何だが、お世辞にも真つ当な存在とは言えなくてな。あまりいい影響を与えてやれるとは思えない。

『それは…』

…だが、まあそうだな。

『…何です?』

…誓いをここに立てよう。我が真名エミヤに於いて、この身とこの手に持ち得る剣と弓、槍を始めとする武具と最強の盾で以て、それが及び、それを至らせる限り、彼女達を最後まで導き、全力で支えらる。

『…』

…言霊の類でしかないが、少なくとも宣誓ではある。すこしは気休めにはなつたかな?

『…いえ、十分です』

…そうか。なら、なりよりだ。

『…彼女達をお願い、します……』

その言葉の後に精霊ルビスの思念は途切れ、

「…ああ」

その言葉に届くかは判らない返事を呟き、目覚めた。
視界に入る、見知らない木の天井…徐に身を起こしてみたがその
予想以上に緩慢な動きに顔を顰める。

「…身体が重い」

これは生前…下手をすれば聖杯戦争時分の状態に近いかもしれない。
い。

把握する為に急ぎ意識を集中し、身体に解析を掛けてみる。が、
そのあまりの状態に視たことを若干後悔した。

「表示に値せず…とは、な」

項目の中でまだ高い方だったモノはまだ、最低のEランクの表示
は付くのだが元々高くない項目などは軒並みにランクすら表示され
ない始末だった。

「…魔術回路は全て健在なのがせめてもの救いか」

精霊ルビスの言葉を鵜呑みにするなら、この封印は徐々に解かれ
るようだが正直に言えば、これでは先が思いやられると少し嘆きた
かった。

「あ、目覚められたんですね」

その声に視線を向けると、気絶前に見た軽鎧姿ではない小綺麗な
格好をした少女が安堵の笑みを浮かべ、開いた扉の所に居た。

その事で、明らかな外から屋内に変わり、助けたはずの人物がこ
うやって此処に訪れるという状況を改めて察する。

「…どうやら助けたつもりが助けられた上に、君達に多大な迷惑を
掛けてしまったらしいな」

「い、いいいいつ。そんなわたし達の方こそ、えと、えとえと
…」

しどろもどろになる少女。

黒髪黒瞳…一見すると日系人のように見えるが、ここが異世界と
いうのもあるので唯単にそうなのだろう。

艶やかな黒髪に強い意志の輝きを宿す瞳、あどけない幼さの残る
容貌はまだ15、6だろう。年齢や外見からの判断はしたくないが、
やはり”彼女”とは違い、全く以て強さというモノを感じられな
かった。だが、

「…うー」

恐らく件の勇者というのやはり彼女なのだろう。

確信出来るのはそう裏付けるかの様な少女が持つ魂…その魂は高
潔さや力強い光を放ち、その存在を顕わにしている為だ。それは素
直に”彼女”と通じるものを感じられて納得出来た。

「…あ、名前っ名前だ！ あ、わたしアルス、アルスと言います
！」

これも精霊ルビスが干渉した結果、か。
そう思いながら自己紹介に応じた。

「私の名は…」

…

何を話せばいいのか、考えが定まらないわたしに天啓が降り、

「…あ、名前っ名前だ！ あ、わたしアルス、アルスと言います！」

あの時、お互いに名乗り合ってもいなかったのを思い出せた。
彼は少し困った笑みをした後、

「私の名はエミヤだ」

そう名乗った。

あの時に見せた背筋が凍るような威圧感はない、そんな笑みだが、それでも隠せていないほどの、自分なんかでは足元にも及ばない高みに居るのだと肌身に感じてしまう身が恨めしい。

「じ、じゃあ、えと…エミヤ、さん」

「まずは落ち着く事が大切だ」

「は、はい！ す…は…」

だから、今のこの緊張が別種のモノになってくれない。だから深

く、深い深呼吸をし、何とか落ち着かせる。

「…ん。えと、お身体の方はどう、ですか？」

彼が目覚めたら一番に聞きたかった事…少しいや、もの凄く心配だった。

「厄介な封印を施されはしたが、彼女曰わく魔物を滅して行けばその内解けるらしい」

彼女、彼女…恐らく、彼の言う彼女は精霊ルビスという存在の事だと思っただけと正直、精霊と名の付く存在なら畏れ多い。

しかし、彼は肝心の事は知らないらしい。

「あの…ただ魔物を倒すだけじゃあダメなんですけど知ってますか？」

「…ふむ、聞いてはいる。確か、何某かの法則があるのだろうか？」

それを聞き、やはり彼は何か違うと確信した。

一般的に冒険を目指す者、魔物打倒を目指す者なら誰でも知り得る、冒険の書を知らないのだ。

「はい。神様の天啓を受けた者から洗礼を貰い受け、かの者が作成した成長を記すの巻物…冒険の書と契約して初めて意味を成すんです。で、」

そう教えながら懷から巻かれた羊皮紙を取り出し、彼の居るベッドへと広げる。

「これが冒険の書です」

名前：アルス

性別：女

職業：勇者

レベル：7

力：18

素早さ：20

体力：15

賢さ：19

運：15

HP / 最大HP：36 / 36

MP / 最大MP：21 / 21

攻撃力：18

防御力：20

次のレベルまで：256P

習得魔法：

メラ、ホイミ、ニフラム

正直、彼に今の自分の強さを見せるのは凄く恥ずかしい。

お世辞にも例として見せるにはあまりにお粗末過ぎる…ユニなら多少見栄えもするが、何故か気分的に頂けない。

「…なるほど、な。して、この冒険の書とやらは私にも契約出来るのかね？」

「え、あ…はい。出来る…と、思い…ま…す」

顔を上げれば、すぐ目の前に彼…エミヤさんの顔。
何の心の準備もしてなかったが為に視界いっぱいになり、それに比例して頭の中が真っ白になる。

「…です。あ、あうう…」

「…？ 顔がひどく紅いが大丈夫かね？」

と、額に軽い衝撃。

「へっ？ えっ、あ、あっああっ」

「ふむ…少し熱がある、かな」

屋内だからとサークレットをしてない状態の額に彼の額が当たり、額と額がコツン

「っな！？ アルス何してんのよ！」

「ひっきゅっ痛っ?!」

「む」

突然の背後からの声に慌てて思わず、エミヤさんの鼻に頭突きを
してしまうが痛いのはこっただけで彼は特にダメージ無さげ。
ふと見ると羊皮紙に書いてあるHPが3も減ってるっ。

「え、嘘っ？」

「アルス！」

「ひゃっ？ 誰ってあ、アーリア？ な、何？！」

後ろに引つ張られて仰け反って上を向くと視界に仲間のアーリアの顔が逆さまに映った。

「な、何？ じゃ、ないわよっ！ 一向に降りてこないから見に来てみれば抜け駆けなんかしてっ！！」

「ぬ、抜け駆け！？」

意味が判らないが、とりあえず誤解であり、アーリアの早とちりである。

「ち、違っしっ。わたし何もしてないからっ」

「じゃ、何であんなに近かったのよっ？」

「そ、それは」

「酷く顔が紅かったのね、額をくっつけて熱を計ったんだが。どつやら微熱があるらしい」

「んなっ？」

「…そ、そうなのイヤ、違っ違っのよっ」
「…」

…あ、あーりあ？

「っ、わっ、わたしも！」

「っ？」

途端に変に力んだアーリアが声を上げる。

良くは分からないが、女の勘が告げている…次のアーリアの言葉は会心の一撃だと。

「…わたしも何か熱っぽいような気がしますっ、計ってもらえませんかっ？」

が、

「ふむ…自覚症状があるなら早期休養をお勧めする」

返ってきたのは予期してなかった痛恨の一撃…彼は何も、ピクリとも素振りもせずにそう告げた。

「…」

「あ、アーリア？」

「…ふえ」

アーリアの目に涙が

「う、う…うつつわああ…んっ、旅の途中でオルテガ様に追い付いたらアルスの有る事無い事を”絶対”告げ口してやるうつつっ」

…は？

「えっ、ちょっ、アーリアあああっ?!」

”絶対”の部分強調という事実無根な中傷の確約を食らい、すくにもアーリアを追い掛けたい衝動に駆られるがまだ目的を達成してないというのが過ぎり、拍子を外してしまう。

アーリアが走り去った後の扉を暫し、見つめた後で一つ溜め息を着くと改めてエミヤさんの方を振り向く。

「まあ…あれだけ元気なら大丈夫だろう」

彼は全く判っていraftしやらない様子…とりあえず、アーリア頑張れと応援したいがわたしに対する今後の仕打ちを考えると微妙。一瞬、当たらなければ会心の一撃も唯の攻撃も変わらない、仕掛ければ必中を旨に須く精進せよ…という言葉がふと過ぎったが意味が判らないので無視しよう。

「本当は”アレ”をさて置きたくはないんですけど、一先ずさて置いて本題に入ります」

「…いまいち良く判らんが、私は謝ったほうがいいのか？」

…はて？

「謝るような事をしたと？」

「…なんとなく、だ」

何故かそんな異な事を仰るエミヤさんに視線を向けるが、白地に逸らされる。

ふと、少しだけさっきのを判ってやったのか否かを懇々と問い詰めたい気もするがそれでは話が進まない…うん、今回は許しましょ

う。

「…はあ。で、この冒険の書ですが、丁度ここの一階ですぐ出来るんですよ」

「そうなのか？ 契約と言うからには色々と準備が掛かるはずだが」

「契約とか準備って言っても、最初に説明しましたけど天啓を受けた者…」ルイード”から洗礼をもらった後、未契約の冒険の書を受け取って、封印してある印字に血を垂らすだけの本当に簡単なものですよ」

「で、後はそれを目安に旅をしながらひたすら精進すればいいだけってわけ」

言葉尻を継ぐ声に振り向くと今度はユニが扉に肩を預けていた。

「ユニ？ どうしたの？」

「アルスさ、どうしたのじゃないって。一体、何やったの？ アーリアがすごい暴走してんだけど？」

「いや、わたしが原因じゃないんだけど…下で何かあったの？」

正直、聞きたくはない。だけど、大切な仲間だから流石に心ば

「絶対捏造してやる…」とか、そうよまずは既成事実で雁字搦めに…とか何とかブツブツ言ってて恐いのなんの」

こっちは悪くない…これはエミヤさんのせいだ、うん。

「一人にして大丈夫なの？」

「いやあゝ最初は同席してたんだけどさあ、見目良いのがイイ感じに病むと怖い怖い。もうね、うちとアーリアが居るテーブルから周り三台キレイに無人で誰も近寄って来ないわ注文すらこないわで何くんか、おまんまにありつけなさそうだしとりあえず見に来たんだわ」

うはああ、頭痛いなー。

「…判ったわ。とりあえず、怖さを半分だけ取り除きに行くからあとの説明お願いしていい？」

「いいけど、あと何か説明する必要あんの？」

「目処が付くまでお願いね」

時間稼げれば何でもいいから適当に、だ。
わたしは覚悟を決めると冒険の書を巻き取ると懐に入れて立ち上がる。

「あとは彼女からお願いします」

「…あ、ああ、判った。何と言えいいか、とりあえず、すまない」

どう言った意味での謝罪かは判らない。けど、絶対に”正確には”判ってないだろう確信がある。

溜め息を一つ着くとユニと入れ替わりに部屋を出て扉を閉めると、向かう先である階下の階段側から発せられる陰鬱な空気に頭を痛めながら、

「はあ……」

アーリアの誤解をどう治めるかを思案しながら向かった。

冒険の書（前書き）

ども、何だかんだで三話目の投稿です。

モンスターの出現分布図等、曖昧な部分が多々あるので古本屋を回ってDQ3の攻略本を探しているのですが、見つからず徒労に終わっています。

とりあえず、その辺りも捏造気味に頑張りますのでご容赦を（謝

冒険の書

「さあてとく…アルスに任せられちゃった訳だけど、どすっかなあー」

入れ替わりに来た少女は何処か明け透けで屈託の無さ、あどけなさが見える。が、一応には警戒しておく。

こういった手合いは総じて色々手強いと相場が決まっているからな。

「とりあえず自己紹介かな。うちはユニっての、よろしくねー」

「エミヤだ。君達には迷惑を掛けてすまないと思っている」

礼を述べると少女…ユニは頭の後ろで両手を組むと、

「いやいや、助けてもらったからどってことないよ」

そう言い、懐かしさを覚えるようなにこやかな笑みで笑う。

「しかし、お兄さん強かったよねー…実は魔王だったり？」

「…は？」

が、唐突な問いに不覚にも間の抜けた返事になってしまい、お互いに微妙な空気が流れ始めて会話がぶつ切りになった。

それだけあまりに飛躍しすぎた事を問われたワケなのだが。

「あー…違う、と言っておこつ」

「ま、だよー」

ユニは悪びれた様子もなく、軽く流す…この場合は気にした方が負けだからな。

しかし、兎にも角にも情報が足りない。事実、その辺りの情報は受け損ねていたので敢えて聞いてみる。

「ふむ…まさか、魔王は”人”か？」

「さあ？」

が、返ってきたのは両の掌を上に向けて肩を軽く竦められたただけだった。

「魔王バラモスってのがどんな図体なのかなんて知らないし、この世界で知ってる人間なんてのうのうと生きてられるかなあ」

全てはベールに包まれたまま、か。

ユニはまだ見ぬ魔王に数多の思いを馳せているのか、眉根を少し寄せて虚空を見やっている。やはり、この手の人間は掴みどころがないな。

それにしても、ただの魔王か。ルビスの言いが確かなら、その先に”大”魔王がいる。ならば、件の魔王バラモスとやらはただの尖兵でしかないと言ったところか。

「…と、話戻すけどお兄さんはホントに強いよねえ。アルスらの中じゃ一応、うちが一番強いんだけど”アレ”は背筋凍ったわあ。で、あれ何？ 魔法？」

そう言つてユニは好奇心を抑えられないのか、ベッドの縁に手を付くと身を乗り出して顔を近づけてきた。

小柄な体格に合わない双丘が手を着く腕に押し出されるのが目に入ったりしたが、とりあえず不自然にならないよう注意しながら思案するような形で視線を逸らす。

「…魔法、と呼べるかは判らないイヤ、おこがましいがな。まあ、あれは私の独自のモノでね。真似出来るモノではないが、あまり公言したくないのが本音だ」

「えーっ、別にいーじゃん」

さて、どう誤魔化したものかと悩む…が、それより兎も角、不満げに批難するユニが更に顔を近付けてくるのが少々、勘弁願いたいところだ。

仕草としてはまるで子供の様で邪気はないのだが、その抑える気のない好奇心は異性に対してのそれがあまりに無防備…要は、

「ねーっ！」

近い、近過ぎるっ。

とりあえず、

「気付いていると思つていたんだがな…」

意識を逸らさせなければ。

「毛色があまりに違い過ぎるのを既に察していて、訊くだけ無駄だということ。君は判つてるのだろう？」

「むっ、ん……んん……っ………はあ、まっね。ご明察」

指摘すると彼女はあっけらかんと言うとベッドからサッと手を離すとその場で胸の前で腕組む。

やはり経験則から思った通りの変わり身の早さに安堵しつつ、身が離れた事を受けてふと溜め息を着くと改めてユニに向き直った。

「気を失う前と、アルスにも言ったのを聴いたと思うが私はもう力を封印された身で……当分アレは出来そうもない」

「え……あ、そだっけ？」

「ああ」

「う、うーん……でも、うん、楽しみなんだなあ。期待してっからね？ エミヤんの冒険の書。あ、お兄さんこれからエミヤだからエミヤんね？ あ、あとユニって呼んでよ。アルスは名前で呼ぶのにうちは”君”なんてヤだし」

にぱっと形容したくなるような楽しそうな笑みを向けられた。

「……了解した。では、今後からユニと呼ばせてもらおうとしよう」

「あ、アーリアもね？」

「ああ」

しかし、エミヤん……か。前に何処かで似た渾名で呼ばれたような気がするが、しかし断り辛いな。

「……まあ、何だ」

別に悪い気はしないがな。

「そろそろ話を戻すが、強さに関しては過度の期待はしないでくれると助かるんだが？」

どうだろうかと見やると一瞬だが、その柳眉が片方だけピクリと動くのを見逃さなかった。

「いやいや、御謙遜を？ 少なくとも、ここアリアハンは言うに及ばず、次のロマリアとかアッサラム周辺程度じゃエミヤンは間違いなく敵無しっしょー」

幾つかの地名が出た。だが、

「…さあ、どうだろうな」

正直、微妙だ。

自信はある。そんな柔で生半可な経験はしていない…が、全ての情報を得た訳でもないのも確かなのだ。

それにこの身の封印と鑑みたとして一体、どこまでの魔物とならこのままでも渡り合えるのか、そんな不安もだが色々と多々あると、

「いや、それでも絶対うちより強いし」

ユニはそう言うが早いか、その中華圏の服の懐、む…いや、何も言うまい。とりあえず、そこからアルスと同じ冒険の書とやらを取り出すとベッドの上に広げだした。

名前：ユ二
性別：女
職業：武闘家
レベル：12
力：22
素早さ：31
体力：25
賢さ：59
運：38
HP / 最大HP：51 / 51
MP / 最大MP：96 / 96
攻撃力：22
防御力：30
次のレベルまで：601P

習得魔法：

メラ、ヒヤド、ギラ、バギ、イオ、ホイミ、ベホイミ、キアリ、
キアリク、スカラ、スクルト、ルカニ、ルカナン、マヌーサ、ピオ
リム、ボミオス、バイキルト

「こんにちは。ね？ 実際さ、エミヤんはうちを自分より強いなんて
微塵も感じてないっしょ？」

否定はしない。が、

「確かに今はそうだろう…しかし、君は私と違い素質がある。遠か
らず追いつき、すぐに追い越すさ」

「…い、いやぁー」冗談をー？」

「私は全く才能が無かったクチでね…だから、君達を羨ましく思う」

「…えとー」

どうしたものかと唸るように返答に急し始めた彼女は頬を掻く。
が、一つ頷くところを今度は威嚇するような笑みを浮かべてきた。

「…うん。どの口が言つのかねー、この御仁はつと言いたい。あと、
また”君”って言ったよ？」

「む…すまない」

裏表がないのか、どうやら齒に衣は着せない主義らしい。
しかし、

「事実なんだが、な」

「…え、と」

「…フツ」

表情が苦いのは自分でも判る。

「…」

「……………っ、ああもおっ何か湿っぱいからっ！ 話題変えよ、話
題を！」

彼女も察したか、この話題はこれ以上続かさず、下からアーリアの呼び声が聞こえるまでの間、かなりギクシャクとした雰囲気を残したままだが話題を色々変えては会話が続いた。

…

アーリアを正気に戻して暫くあと、精も根も尽き果てていた所にエミヤさんとユニが上の階から降りてきて、わたしとアーリアの居るテーブルに来たそうだ。

「ユニ、エミヤさんに粗相してないでしょうね？」

と、何やら突っ伏してる状態から復活するまでに、アーリアから端を発してユニに何かと突っかかりとかがあつたらしいのだが、その時は精も根も尽き果てて突っ伏してたのでそんな預かり知らない所で起きた事は割愛です…だって、直接見てないし、聴いてなかったし、巻き込まれたくないので。

「へえええ…」

で、今まさににアリアハンのルイーダことアルデアさんが何やら感心したような声を漏らしながらエミヤさんを見ています…髪の毛の先から爪先までじつくりと。

何か、アルデアさんに見られてるのが落ち着かない。別に普通に見極めようとしてるだけではあるのだけれど、アルデアさんは美人

だ。正確な年齢は知らないけど。

昔、一度訊いてみたような記憶があるんだけど、

その間の記憶がない。

あれ、何でだろ？

とりあえず、女のわたしから見ても綺麗な大人の女性だ。

「中々、いい男じゃないのさ？　で、三人の中でどっちのイイ人なの？」

「ふえっ？」

真剣に見極めていたと思っていたアルデアさんの視線は何と、懸念通りのモノでした。

しかも間の悪い事にエミヤさんを髪の手から爪先までをじっくり見ているのを見た後。そんないきなりの問題発言にわたし達は不必要に慌てた。

「いい、いやあの、アルデアさん達」

「いやいや、三人のどっちとかじゃなくて三人共が、ですよー」

「そうなの？　あらやだ、三人とも隅に置けないわねえ」

は？

「…ちよつと、アルスだけじゃなくてユニもなの？」

「さあね？」

「…」

アーリア？ アーリアあつ？

「…ちよつ、あ、あの…お願いだからアーリアを煽らないでよユニ
いいいっ！」

嗚呼、違つた…若干一名は慌てもせずに冷静にかき回してくれて
る。

ユニの冗談にもならないハズのその場発言でアーリアの瞳から光
が消え、かなりドス黒い眼差しをユニに向け始めた。しかし、

「はっはっはーっ、冗談だよ冗談。最終的にはエミヤんが決める事
だしー、うちらがどうこう言つたつて仕方ない仕方ない」

それを難なく躲すユニ。

自分で種を巻いて自分で刈り取っていく…スゴいなあ。

「…っ。そ、そうよねっ！」

そんなユニの言葉にアーリアの瞳に光が

「い、いや、そうか…そうよ決めるのはエミヤさんだもの。だから、
その瞬間まで…ぶつぶつ」

ひいっ、戻らないっ！

ドス黒い視線は無くなつたけど何やらブツブツと呟いて…だけど、
頬は紅らんでて時折に漏らす吐息は何か熱い溜め息。

もっ、傍目からも本当に完全に病んでて少し怖い…アーリアあゝ、
帰ってきてえー！

「…？ あら、アルス…何を泣いてるの？」

こちらに気付いたアーリア…瞳に光が戻っていて、そこにはいつもの彼女が居る。

「え、あ」

「はあ…全く、アルスったら昔と変わらず涙腺弱いんだから」

小物入れから清潔な布切れを取り出すと溢れて伝っていく涙を拭っていく。

向こうはこうもヤキモキしてる訳に気付いてない。しかも、彼女自身が己の異常さに気付いてない…正直、あまり良く判らないがアーリアの精神状態はヒドく危ういのでは？ と、気になって仕方ないです。

「…で、私は冒険の書に契約を行っても問題はないのかな？」

そんなわたし達の向こうでエミヤさんがさっきのやり取りなんか全て無かったかのようにアルデアさんに訊いていた。

この間、彼は一切こっちを向いていないし特に興味ない様を装ってはいる。が、アーリアの事を薄々気付いたのか、こめかみには一筋の汗…と、シニカルな笑みを浮かべようとして若干ヒクついているので失敗している。

彼が気付いたならいい機会だし、徐々にも責任を取って貰おう。何故なら、

「出来るさ。で、アルス達と固定パーティーを組むと」

「ああ」

そう。わたし達是以降、エミヤさんと共に旅をする…魔王バラモスを倒す旅に。

「いやあ、男手が出来るとこれから楽になるねえ」

「…夜…旅先の宿、野宿の時とか……うふ、ふふふっ」

そして、今わたしの涙を拭いながら妄想に耽るアーリアのこの様に気付いたのを踏まえていても、敢えてこっちに來てくれたその勇氣。

出来る事なら貴方を”勇者”と称したい。

「本来なら色々と手続きがあるのだけれど、アルス達直々の推薦だし、省きましょう」

「え？」

と、アルデアさんのその言葉に思わず目を向ける。

洗礼…ただ質問を幾つかするだけとは言え、神聖な行為には変わりはない。

不敬にならないだろうか？

「…実は、夢でまさかの天啓が來てね。内容は勇者アルスが連れてきた者を必ずこの旅に同行させよ、て」

…それって、

「本当ですか？」

「おおつエミヤん、スゴいね。神様から御指名じゃん」

「神様ありがとうございますっ」

アーリアが祈りを捧げているのは置いておき、ユニの言葉はあながち間違いないじゃないような気がする。

「…なら、なりよりだ」

それに対して彼には何の動揺は見えない。

エミヤさん、貴方は本当に何者なんですか？

「じゃあ、早速コレに血を垂らして…ここ、この蠟の押し印の窪みに一滴だけでいいから」

「ふむ。では…」

エミヤさんは指先の腹を歯で小さく食い破ると、ツツと流れた血の珠をその窪みに垂らす。

アルデアさんが蠟の窪みに彼の血が滴り落ちるのを見届けると契約の詞を紡ぎ始めた。

「…彼の者の血と聖印の蠟は今ここに混ざれり、そして”世界”との契約を成さん」

詞が終わると押し印が輝き、紐が解かれていく。

「…ふん」

「？」

何故か小さく鼻を鳴らすエミヤさん。

何故、不機嫌になったのを不思議に思っていると彼の冒険の書が開ききり、羊皮紙の表面に字が浮かび上がってきたので一旦、そちらに集中する。

「さてさてー、エミヤんの能力を拝けーん」

「エミヤさまはきつと、わたし達なんかより断然強いわよ」

確かにそれは間違いないだろう。そして、表示されていく文面。

「あ、見えた」

しかし、

「「「ん?」「」」」

突然の異音。

「何の音?」

「つて、冒険の書がつ!?!」

「え、あ」

「ちょっと…何コレ」

その異音が発したと同時に書かれていた文字が崩れだし、所々かなり読みづらくなっているが読めなくはない。

■前：エミヤ

性別：男

職■：守護者

■ベル：1 / 封■

力：4 ■ / 封印

素■さ：6 8 / 封印

体力：5 3 ■封印

■さ：6 6 / ■印

運：1 ■ / 封印

HP / 最■HP：1 0 3 / ■印

M ■ / 最大M ■：5 8 / 封印

攻撃■：4 4

防■力：1 5 3

次の■ベル■■：5 2 ■6 P

■得魔■：

投■、強化、■析

「スゴつ、レベル1でこんな状態なんてエミヤさんスゴいです!」

確かにスゴい。

まだレベル1なのにこの数値。わたし達と同じレベル1からの出発地点だったのにこんなにも違う。

それに封印という状態は身体中に巻かれた鎖が恐らく、封印のそれ。あれが全て解かれた時、この数値は一体どのような数値を叩き出すのか、気になる。

「イヤ、アリア違うって。つか、先に何コレでしょ? 文字化けって言うか、うわ怖っ! しかも滅多やたらに封印封印って何ですか

っ？　つか、防御力153ってエミヤン今着てるそれって何よっ！
」

確かに文面の異様さもさることながら、目を引く数値と更に気になるのが防御力の高さ。

「…今、私が着ているこれはある聖人を包んでいたものの布で出来ていてな。確かに防御力に関しては一級品だろう」

聖人って何ですかソレ？

あと、

「えと…この習得魔法の欄にある、投…何とかや強化、えと…何か析とは？」

「そう呼ぶのは正直、おこがましいんだが、要はこちらで言うところの”魔法”だと思ってくれていい」

魔法、魔法…全く既存の魔法が書かれていない。エミヤさんの言いはヒドく曖昧だけど、却ってそれがあの時見た魔法はわたし達が知らない魔法なんだと教えている。

「…どうしたものかしら」

と、蚊帳の外でジッと冒険の書を見ていたアルデアさんが呟くとエミヤさんを見据え始めた。

「”守護者”なんて前例の無い役職に加えてレベル1で既にこの高能力…しかも、訳の判らない封印付き。正直、事前に天啓を受けてなかったらこんな怪しい人物をアルス達の固定パーティーに入れる

のは躊躇ってだし、冒険の書の契約なんてしなかったわね」

かなり剣呑な言葉。

そして、エミヤさんに向けられていたアルデアさんの怖い視線がわたしに来た。

「…アルス」

「は、ひ、ひゃい！ 何でしょうっ？」

アルデアさんに小さい頃から頭が上がらないのもあるが、本人も昔は腕を鳴らしたらしく少なくとも自分なんかよりも強い。

天啓がなければアリアハンの自警に大いに貢献しただろう。その圧力は森で出会った時のエミヤさん程じゃないにしろ、それでもわたしの心臓に悪いっ。

「旅の間に必ずダーマ神殿に寄りなさい！ 本当なら貴女達と離れたいけど、やっぱり天啓は無視出来ないから」

「まあまあ大丈夫じよぶよ！ エミヤん良い人だよ、うちらが危ない所を助けてくれたんだし問題ナシっ！」

「そうよ！ この程度の障害っ、障害ですらあらず！」

ユニはいいとして…アーリアあゝ、お願いだから黙ってー。

「…はあ。わたしもユニと同意見です。魔物の群れ…二十近い数に襲われたところを助けてもらいましたし」

「…ふう…判ってる、判ってるのよ。天啓云々の前に貴女達が彼を

既に信頼してるってのは傍目からも判ってるから。でなきゃ、固定パーティー組みたいなんて言い出さないでしょうし」

アルデアさんはそう言って一つ溜め息を着くとエミヤさんに向き直った。

「…任せたわよ。けど、くれぐれもこの子達、妹分を裏切ったらどこまでも追い掛けてその首、貰い受けるから。覚悟してね」

「…フツ、元よりそのつもりだ。それに私の目的も魔王の打倒…だから、裏切る気など毛頭ない」

そう、言葉にしたエミヤさんの横顔は凄く

「きゃー、エミヤさまカッコイイ！」

そう、確かにカッコイイ。

彼の横顔からは裏打ちされた自信の表れが見える。わたしもいつか、このような表情が自然と出来るように成りたい…あと、

嗚呼、とうとうアーリアがエミヤさんを様付けに。

エミヤさんが旅に付いて来てくれて嬉しい…けど、アーリアの精神状態が気になって仕方がない。

その辺り、直接の原因ですしちゃんと責任に持たせないと等々と色々なモノを心の中、わたしは静かに決意した。

冒険の書（後書き）

エミヤ、冒険の書と契約す…喚ばれたから出てきたのに、何気にDQ3の世界システムに嫌われるエミヤんの図でした（笑

さて、次回は”いざないの洞窟”。

後にはロマリア周辺、カザーブ・ノアニール・アッサラームとか

…正直、出現モンスターが曖昧。

確か、

キャタピラー、アルミラージ、さまよう鎧、ホイミスライム、軍隊蟹、地獄のハサミ、お化けきのこ、暴れ猿、こつもり男、バブルスライム、かえんむかで…

ぐらいでしたっけ？

もし、足りないや間違えてる場合はご指摘をお願いします（礼

齟齬（前書き）

はい、四話目です。

かなり捏造入ってます。

なるべく世界観を壊さないように考えましたが、設定を受け入れない読者様がいらっしやるのは確実だと思います。ですので、軽くスルーを……て、無理かなあーやっぱり。

まあ、それは一旦はさて置きます……はふう（一息つく

とりあえず第四話目、楽しんでいただければ幸いです。ではでは、どうぞー。

齟齬

結果として、無事に契約し終えたのは蠟に血を垂らすこと数十回…その間に使用した冒険の書も数十枚を契約破棄の繰り返しにより無駄にし、漸く文字化けを起こさないまともな状態の冒険の書を手にすることが出来たのは陽も落ちた頃合いだった。

「ありゃあー…もう夕方だー」

「…どうするの、アルス？」

「うーん…でも、壁はもう崩れてるし番兵さんには今日行くって言っちゃったし……うーん」

そう、外の様子を見ていたアルス達は最初はどうかと相談していたのだが、部屋での二人の気分が優れない旨をユニに告げるとアルスとアリアは微妙な顔をし、ユニが大笑いされたのだが何でだ？

とりあえず、それが切欠に次の大陸へは翌日となり、今夜は英気を養うことになり部屋に戻ってきた。

「…はあ」

別段、肉体的な疲労は感じる事など無い身体だが、部屋に戻り、ベッドに腰掛けると知らずと溜め息を口に出していた。

「…精神的な気疲れ、か。未だに人間じみた感覚が残る…何とも継

ぎ接ぎな存在だな、英霊というのは」

感情もない機械ならば、胸糞の悪い結果をしてナニ力をすり減らさずに済んだだろうに。

だが、

「…」

今はこの、心があることを幸いに思うという反面が確かに存在した。

「こっちは…」

あの時の聖杯戦争に近いものがあつた。

日常と非日常…平穏な生活があり、一歩踏み出せば血生臭い、人と魔の戦いがある。それでも尚、

「こつも時間の流れをゆつくりと感じられたのは…久しく無かつたな」

この身はもう、ただ滅ぼし、殲滅するだけの掃除屋でしかなかった。だからこそ、

今、この時、これは本当に良いものだな、と感じられた。

この世界の日常を垣間見て、中々に賑やかだったのを思い出す。ルイードの役職というアルデアも半ば自棄になっていたのが印象的だった。

何でも高レベル乃至、高数値の冒険者を登録すれば箔が付くらしく、件のダーマ神殿とやらは数多くの冒険者達が立ち寄るのだが、

際に冒険の書の一部の共有や登録地が記録される為、高レベルのそれは又、数多くの冒険者に目が着き、宣伝になるそうだ。

「最初は此処も冒険者達の始まりの地として賑わってたんだけど、ね。色々…そう、色々あったのよ」

「…」

その時のアルスの表情に翳りがあったのも印象に残っている。その理由を自分は知っている…

「オルテガ…だったか。アルスの父親は」

不完全な情報ではあるが、世界から送られてきていた。

家族を…幼い一人娘を残して一人旅立ち、故郷へ帰ることもせずここから遙か遠い大地で命を落としたらしい。

「…お互い、父親というモノに恵まれなかったと言うことか」

口角が自嘲の形を取る。

こちらは晩年は常に家に居はした、最後まで自分が看取った。だが、それが全て良いわけではなかった。

今日までの全て、爺さんの…衛宮切嗣の所為ではないのは判っている。だが、今あるこの成れの果ての出発地点はやはり、あの夜なのだ。

「…導き、支えろ…か」

精霊ルビスの言葉を思い返す…真に、この身は本当にアルスを導くに相応しいのかという疑問がついて回る。

「…フッ」

とは言え、己は既に誓い立てた身…ならば、

「差し当たって、まずは出来る事をするのみだ」

そう。自分は、エミヤ シロウはそうやって物事に対処してきたのだから。

翌日、

「えと…これは？」

彼女達が部屋を訪れる前に準備を終えていた私は、親睦も兼ねて幾つかの武器を作製したのを出入り口から姿を現した彼女達に早速手渡した。

朝早くに鍛冶屋から金属を分けて貰い、それを素材の基本骨子として投影を重ね合わせることによって存在を固定させ、実体を得させた品。

まず、アルスに渡したのは

「それはアゾット剣と言う」

昨日の内に腰物が大分傷んでるのには解析から気付いていた。

わざわざ研ぎや買い換えるのは費用や日数が掛かるのもあるし、材料を集める過程で見ていったが此処の武器はあまり良い品がなく、さりとて在るようにも見えず、こちらで用立てる事は確定になっていた。

「斬れ味は下手なモノよりも断然いいと保証する、使ってやってく

れ」

「えっ、えっあ、ほ、ほんとに良いんですかっ？ ホントにっ！？
わ、わー、わあー、わあぁ…」

気に入って貰えたらしく、アルスは瞳を輝かせながらその刀身に見入っている。

このソースは”彼女”から借り受けて使用した、”あの時”のアゾット剣。見た目は実際よりも刀身を一尺ほど伸ばしたのみで柄に埋められた宝石には”彼女の魔力”があの時と同様に丸々と宿っている。

起動コードを発すれば急場の保険になる…少なくともB→A→ラ
ンク相当は有ったはずだ。

「エミヤンエミヤン？」

…ん？

玩具を買って貰った子供のようにはしゃぐアルスを眺めながら曖昧になってしまった記憶から情報を引き出していると、ユニが袖を引っ張っているのに気付いた。

「どうかしたか？」

「いや、どうかしたかって言うか…あの、さ」

何処か申し訳なさそうな表情のユニは自分に贈られた武器をこちらに掲げて見せる。

「うち、剣使わないんだわ」

「…ふむ」

確かに武器は拳という感じたが、武道とはそれが全てではない。

「雄剣・干将、雌剣・莫耶…この旅は危険だから」

武闘家とは言え、全てが素手でまかり通る等とは思わない方がいいだろう。

その点で至ったのが、この双剣・干将莫耶だった。

「試しに何度かそれを用いて軽く演武をすればいい。案外しっくりくるぞ？」

「うーん…まあ、くれるって言うなら使ってみるけどさあ？ んー…むー…」

言つて、ユニは離れると軽い演武ついでに双剣を振るい始めるが、顔はいまいち腑に落ちていない様子だ。

干将莫耶を手に取り、この生涯を閉じるまで共に歩み、この手に馴染ませるまでには至ったモノが己が手から離れて使われるというのは感傷にも似た感慨じみたものが込み上げくる、これは自惚れだろうか？

だが、

「最初は確かに多少の違和感があるだろうが、相性は合うはずだ」

自負がある。

使い手が存在しないとされる双剣・干将莫耶…その、真の使い手とまでは成れないまでも。

「あ、あのつ、エミヤさま…エミヤさま？」

「…ん？」

ゆつくりと型をなぞりながら演武を行うユニを見やっている内、少し物思いに耽すぎたらしい。

何度も袖を引っ張られている感覚に気付き、目を向けると今度はアーリアが後ろから遠慮がちに外套を引っ張っていた。表情から察するに、理由はユニと同じらしい…まあ、

「疑問はもつともだろうな」

「お、お分かりのようなら、何故、わたしも剣なんでしょう？」

「それはクリスナーガと言って魔術兵装なんだが、この世界には魔法を封じる術があると聞いてね。短剣なのはもしもの時の護身用…それは軽いヤツだから君にも充分扱える」

「で、ですけど…わたし、杖が無いと魔法の威力が」

「その点は心配ない。それは儀式等で祭具としても使われる触媒の品、私の感覚が正しければ杖代わりになる。一度、同じ感覚で使ってみてくれないか？」

「そ、そうなんですか？ え、えと……」

目の前でアーリアは軽く目を瞑り、集中し始め、

「……？ あっ…あ、わわっ、な、何て言うか、魔力っ魔力がスゴく通し易いです！」

すぐに目を見開き、驚嘆の声を上げる。

その後は不思議そうしながらも、アーリアもアルスと同様に物珍しげに短剣を見やり始めた。

「よっ、はっ！」

掛け声に視線を向けると今一つの掴みだったユニだが…

「ふっ……ふう……っは！」

演武中にある一つの型、その始まりから終わりへの一連の動作がかなりの速さになっているのを見るにもう折り合いが着き始めているようだ。

表情にも刀剣を使うという、新しい途が拓かれて少し嬉しげに見える。

「…フッ」

やはり、素質がある者は違うなと知らされる…先の感慨をすぐにも奥底へと追いやった。

「さて…気に入って貰えたようで、とてもなによりだ。今後の旅に大いに役立てて貰えると贈った本人としては嬉しい」

「はい！ わたし大事に使います！」

「うちもうちも！」

「エミヤさま、ありがとうございますっ！」

「いや何、ちょっとした贈り物だったんだがここまで喜ばれるとは

思ってなかったよ」

三人の満面な笑みを見て、徒労と終わらずに良かったと柄にもなく内心で安堵してしまったのはここだけの話だ。

…

「ついいよいつつしょおおーっ!」

久々にユニの景気の良い掛け声が響き渡る。

今、わたし達はいざないの洞窟への近道として森を横断中。やはりと言うか、

「…はあ。今日も、多い…っ!」

たった2日とは言え流石に二晩を越えるとこの辺りでは見当たらない魔物が増えて来ていた。

目的地に近付くにつれて特に顕著というか、正直、突然襲い掛かってきた一角うさが良く見たら何故か紫色で、いきなり『ラリホー』を唱えてきたのには驚いたの言うまでもなく、

「ぜえあああっ!」

この辺りでは見たことが無い、銀毛の大アリクイを一刀の下に斬り伏せて周りを見回す。

「《メラ》!!」

アーリアが《マヌーサ》によって、幾重にも重ねられた残像の所為で輪郭と位置が曖昧になったじんめんちょうの群れを《メラ》で全て巻き込んで焼き倒しているのが視界に入った。

どうも、エミヤさんの武器に変えてから《メラ》の規模が倍加近く大きくなっているような気がする… あれはもう中級の《メラミ》と言っていいような大きさと威りよ

「GeツツK O A A A a a a ! ?」

「っわ! ?」

すぐ耳の横で起こった断末魔にビクツとして慌てて見やると、そのすぐ目の前でエミヤさんの大弓のハンドガードの部分で殴られ、フロツガーが吹き飛んでいく光景が見え、あまりの会心の一撃っぷりに思わず飛ばされた魔物を見送っていつてしまう。

地を跳ねても勢いはそのままに何度も宙を舞うたびに放たれた矢が一本二本と突き刺さっていき、近場の木の幹へとぶつかり、礫にされた頃にはフロツガーは全身針鼠のようになっていた。

「スゴい…」

「敵と交戦中に余所見とは注意力が散漫だな、アルス」

…はっ!

「すっ、すみませんっ!」

「ふむ…今は言葉よりも行動だと思うが、な」

言葉と同時に矢を番え、別の標的に向かって放っていく。

先のフロツガーの末路を何か思うよりも先にその流れるような、矢継ぎ早に放つのに一切の無駄や淀みない動作に今が戦闘中だというのを忘れてしまう程に魅入ってしまった

「魅入るのも結構だが、今は戦闘中だぞ」

…うつ。

「あ、あうう…す、すみません！ え、えとっ」

呆れの混じったエミヤさんの言葉に又もや、はたと我に帰ると茫然自失していた自分を恥じると慌てて周りを見渡して標的を探し、捉えた。

「い、いつてきます！」

「ああ。露払いは任せろ」

「あ…はっはい！」

勢い込んだものの実際は半ば逃げるように彼から離れ、魔物へと斬りかかる。が、

「ツ a A ツ！！？」

その一撃は奇しくも会心のもとに一刀両断にしてしまった。

「…え、あ、あれ？ えと…」

思わず嗚呼、これじゃあ間が保たないと内心で嘆く。

「っ、次っ!!」

焦る中、背中に視線を感じつつも休みなく次の標的を探すと、これこそ八つ当たりのように魔物の群れに突撃した。

「っふ………はあっっ!!」

おおありくいの分厚い脂肪ごと、さまよう鎧の鉄製であるはずのその装甲ごと、エミヤさんから戴いた”アゾット剣”で一刀両断にしていく。

そうする内、エミヤさんからかなり離れた為か段々と落ち着きを取り戻し、戦闘に専念する事が出来始めた。

「…………っ、っだあああっ!!」

だけど、

「…っ、くっ」

一太刀、一太刀と…敵を斬りつけてその都度、屠られていくのを見る度に何故か今度は別の焦燥感が湧き出てくる。

そして、また別のさまよう鎧に相対し対峙するのも早々に切り結んだ直ぐには、剣筋を防ぐ相手の”剣ごと”呆気なく叩き斬っていた。

「っは、はあっ、はっあ…っ…………っ」

別段、大して手こずりもしていない…それでも息が知れずに上がっていく。

視線だけで敵の残りを見やり、あとは皆が相手取る以外には居ない事、その対処に危なげもないのを確認すると自分の手元をジッと見やる。

「……」

刀身は美しい淡紫、研がれた刃は白く、鉄を切り裂いた”刃零れ”は一つもない。
”何も言われぬ焦燥感……これは、

剣に自分が追いついていない事に因るものなのだと

気付いた。

正直、数刻前の浮かれた自分を殴りたい。ついこの間はさまよう鎧にすら近寄れないままに終わったのに、たった昨日今日の二日でこんなに劇的に変わってしまった。

「っしやあー、全滅確認！ しゅーりょー！」

”遠く”でユニが勝ち鬨の喜声を上げている。

広範囲に戦闘を展開した訳でもない、すぐ近くに居るはずなのにそれが、

「ユニ、アリア。怪我、ない？」

やけに、

「ははーっ、ぜっこーちよー」

「ええ。この辺りでは負ける気がしないわね」

遠く感じた。

「…うん。エミヤさんは…って、訊くまでもないですよね」

こっちに集まる二人を見た後、エミヤさんの方を見る。

「…フツ。私としてはそう訊いて貰えるだけでも有り難いがね。まあ、この程度なら問題ない」

薄く笑みを浮かべた彼は、大弓を肩に担ぎながらこっちに来ていた。

「やあ、エミヤさんがパーティーに入ってくれた今なら難なく行けるうーとは思ってたけど、ほんっと楽だわあー」

「…」

ユニは朗らかに双剣…干将と莫耶だったかな？ それらを各々の指と手首で器用に舞わしながら後ろ腰に取り付けた革製の鞘に収める。

その様はもう、双剣を自分の物にしているようにも見える。

「…わたし、は、最初はエミヤ様から戴いた新しい武器に戸惑ったわっ。ふう…」

アーリアは鞘口と刃先を凝視しながら、刃先を入れ損なって指を突き刺さないように恐る恐るといった風に短剣…クリスナーガを収めると安堵したように一息着いた。

当たり前だ、彼女の本職は魔法使い…この慣れてなさには至極当然だ。

「でも、無事で済んで何よりだよ」

わたしと違って。

「ふっ…」

この不具合は長引く、そう感じて少し憂鬱になる…アゾット剣の剣先を鞘口に当てながらそう締め括り、納刀する。

鞘口から金属同士の澄んだ金属音が鳴った…戦闘終了の合図。

「さ、急ぎましょ」

いざないの洞窟へと歩を向けた。

アリアハン大陸にある森…いざないの洞窟へと向かうに当たり、本来なら大きく迂回してレーベを介しながら魔物との突発的な遭遇率の低い平原を行くのだが、今はその最短…森の直中を突っ切っているわけだけけど、

「いやぁ楽チン楽チン」

「本当に三人の時では考えられないわよね」

周りを警戒しながら森を歩く中、本当なら極度の緊張感があるはずのだがヒドく緩い。

その原因の彼、

「…」

エミヤさんは何か考え込むように気難しい表情をしてい、る…あれ？

「どうかしたのですか？」

「…ああ、すまない。これなんだが」

言つとエミヤさんは歩を速めてこちらに歩み寄ると手のひらに乗せたそれを見せてくれた。

「魔物を倒した時に零れ落ちたこれが気になってね。君たちが拾っていたので私も拾って置いたんだが、これは何なのかね？」

手のひらの上に乗せた、ソレ…本来なら馴染み深いモノのはずのモノ。

「お、よ…？ えと…それ、魔物達を魔物つて定義付ける原因ので魔力結晶…なんだけどなー」

「ええ、この世界の常識…のはずなんですけど」

「…む、そうなのか」

知らないらしいエミヤさんは困った顔を始める…えと、

「元々…魔物も只の野生動物やその死んだ死骸、無機物だったものなんです。それが魔力を取り込んで出来上がったのが、この魔力結晶なんです」

「ふ、む…」

説明するもエミヤさんの眉間には益々、

「あ、あれ…？」

皺が寄っていく。

「あー… んでね？ 大気中の魔力ってホントなら何の方向性も無く、魔力を操る術を知らないのには特に影響とか与えられないはずなんだよね。けど、魔王バラモスが現れたせいで気性荒いのが軒並み凶暴化しちゃってさ… 魔力結晶ってのはね？ その影響と同時に負の方向性を持たされて取り込まれちゃった魔力が体内で濾過されて結晶化したものなわけよ」

ユニがさっきの説明を噛み砕いて伝えていく。それで理解が至ったのか若干、眉間の皺が緩むのは

「むー…」

何か複雑な心境になる。

「ただ魔力を取り込んだだけならば良かったのですが、魔王バラモスの影響で魔力に負の属性が付加されました。野生動物が凶暴化したのはそれが原因です… そして、その影響は動物や虫、植物では飽きたらず、その死骸や人間、果ては…」

アーリアが石を拾って手の平に乗せた。

「こんな石や土にまで及びました」

「…その結果が、青い流水形の物体、成人大の蟻食いや角が生えた魔法まで使う兎に伽藍胴で動く鎧と言うわけか」

トドメの説明が入って、エミヤさんの眉間の皺は無くなった。

「あ、因みにその青い物体…スライムなんかはね？ 動物の死蝻やそれから染み出た体液の集合体なんだわ。あーもー、あれ、あの死んだ魚みたいな眠ってホントなんか気持ち悪いよねー」

ユニの言いに旅に出始めた頃、十匹近いスライムに囲まれた時の事を思い出す。

自分達に向けられる死んだ魚のような眼、ちよつと怖かった。

「そして、それから厄介なのが食物連鎖…魔物にも弱肉強食の理があります。弱いモノは淘汰され、後に残った強いモノがその魔力水晶を飲み込んでその存在は強化されていく」

「…なら、多種多様に徒党を組んで襲ってくる理由は？」

そんな理解の色が広がるエミヤさんの顔を見て少し泣きが入りそう。

「基本的に魔物は人に仇なす存在。けど、人は大なり小なり魔力を持ち、それを操る術を最初から持つて生まれてくる。ですが、その素養がいくら高くても磨かなければ意味がありません。知らずに暮らす人が大多数なんです」

「襲われて喰われちゃった中には底辺の魔物なんかよりも高めな魔力を持った人が居る…だから、色々と悪知恵働かして徒党組んで襲ってくるってのは最低でも血とか体液で味をしめたのが中心ってなワケ」

緩んでいた思考が引き締まっていく。

血を啜り尽くし、肉を喰らい尽くし、骨をしゃぶり尽くし、魂をも飲み込む魔物は全てを喰らい尽くす。

存在した跡すら残らない…目の当たりにし、そこで人が生きていて、ついさっきまで存在したという記憶しか残らず、そこから逃げ遅れれば同様にこの世から消える。

「…魔力水晶は放置すると害にしかならないので、なるべく回収して換金所で換金してもらうんですよ」

「…なるべくとは？」

「…あんまり大量に持ち歩いたまんまで居ると寄ってくるんです、団体で」

「これ、噂なんだけど…どっかのパーティーがレートを気にして換金すんの先延ばし先延ばしにしたらしいんだわ。でね、ある時にその辺りで一番の大物を倒して魔力水晶を手にしたその日、そこで夜営してたらしいんだけど」

そう、それはあまりに有名な噂。

「次の朝には散らかった焚き火の跡に水晶を入れていたらしきボロボロの道具袋、刃零れした武器やヘコんだり切り裂かれた装備品を残して全員が消えたそうです。以前から魔物との遭遇率が多くて夜営の度に聖水を撒いた上で見張りも立て、常に備えていたのに」

夜営の周りを囲むように大量の魔物の痕跡があったらしく、正確な数が判別出来ない程の大軍に襲われたという事。そして、前兆もあつた事から魔力水晶はこまめに換金することが常識になったという。

「…魔力水晶はその後どうなる？」

「えとねー…教会で負の浄化をして、質の良い一部は教会に寄付。残りは換金所を指揮する組合に持ってって渡して加工して、宝石とかの装飾品にして国や国民に売る…だったかなー」

詳しくは自分でも知らないが、御守りから宝石や他にも色々な用途で使われているらしい。かく言うと、魔力結晶製の御守りを身に付けていたりする。

そうして一通りの説明を終えると、

「…何とも、な」

そうエミヤさんはそう呟いていた。

何だか遠くを見つめながら自分達と歩くその表情は何故か納得がいかない風で…でも、何処か感慨深げなのが印象に残った。

齟齬（後書き）

…設定、上手く溶け込むかが心配です。

当初は、ユニは暗器の一つである”我眉刺”にしようかな？ と思ってたのですが武闘家とは素手、拳法という考えなので中華圏ならエミヤの代名詞”双剣・干将莫耶”があり、わざわざマイナーな我眉刺にせんでもと思い、それにしました。

そして、アルスにアゾット剣：これは自分の中では直ぐに思い付きましたね、しかも、凜から貰ったヤツ。一応はランクを振ってはありますが、思いつき捏造ですのであしからず。

アーリアのクリスナーガは迷いました：”杖”が思い浮かばなかったのもありまして、悩む中でふと”どくばり”の存在を思い出したのが切欠。ふむ、短剣か！…と思案し、クリスナーガが出てきたわけです。

…と、あんまりこうゆうのは長々と書き連ねても仕方ありませんよね。では、次の第五話に向けて頑張りますので宜しく願います。

あ、次のあとがきには軽くヒロインキャラとなる三人の外見設定を一人ずつ書こつかなと思ってますので記憶の片隅にでも置いていて下さい、では。

御輿（前書き）

うーん、遅めになっちゃいましたね。

今も二話先の話を書いてるんですが、遅筆っぷりに悩まされてます。

気分転換にオリジナル小説なんか新しく投稿したりもしましたし
ま、あちらは超遅筆になるでしょうが、こちらを最優先に書いて
いきますので。

では、どぞー。

御輿

切り立った崖のような山を迂回し、目的地となる”いざないの洞窟”という場所に着いた。

ここは元々、陸路の交易方法として使われていたそうだが、魔物の出現と国家間との諸事情により分厚い壁を設けて塞いでいたらしい。が、今は大きなひび割れを伴った巨大な穴がそこにはあった。

「…やっと来やがったか」

見張りの兵、か…武装した若者は思う所でもあるのか憎々しげにこちらを見やっており、

「よし、殴らせろ」

それに対する返事の開口一番はユニの物騒なモノだった。
なんでさ。いや、

「ワケが判らんのだが…？」

危うく、久しく口にしてなかった口癖が出てしまいそうになる。
それだけ、彼女の言いは突飛だった。

「いやあー、魔物を通すって職務怠慢も良いところっしょ？ その装備は飾りかと言いたい！ つか、どう見てもアルスより良い装備のクセしてさっ！」

「……一人でやれる事にも限界があるんだよ。逆に誉めてほしいぜ、
ったく」

兵士はぶつぶつと何かを呟いている。

その、隠す気もない白地な表情を見るにこちらに対してあまり良い感情を持つてゐる風には見えない。

「はあ……さつさとお通り下さいませんか？　自分は通つた後にすぐ塞ぐ作業に入らなければならないので」

「ちよつとっ！　こつちは命懸けで」

「ユニ」

更に言い募ろうとしたユニをアーリアが止めに入ると同時に、アルスは一步前に出ると兵士に向かって口を開いた。

「……予定ではもっと早くに訪れるつもりでしたが、少し込み入った事がありましたので」

「ケツ……」

内容を聞いた兵士の視線がこちらに向く。が、明らかに好意的なモノとは言い難い……イヤ、嘲っている風にも取れる。

「女三人、野郎一人ね……？　どうやって取り入った知らないが羨ましいなあ、おい。ええ？　ケケツ……」

何にしても不愉快極まりない厭な眼には違いなかった……これは、アルス達の立ち位置を表しているのか？

「…あんまりエミヤさまを悪く言わない方がいいですよ？　この方は少なくともあなたみたいな雑魚よりもお強いんですから」

…アーリア？

「は？　ざ、雑魚であつ！？」

背筋に来る、底冷えさせるような声色に横を見やると彼女の瞳から光が消え…あー、アーリア？

「いや、まあ雑魚かもね？　イヤもう雑魚確定、あの程度の魔物を通しちゃうぐらいだし。アルス達には悪いけど、アリアハンもホント人材不足だよねホント…一応、要所な此処を守る役目のクセに情けないったら。うん…無いわぁ」

…ユニ。君も何なんだ、一体？

そんな、好き勝手に嘲る二人にアルスと言えば、

「…」

彼女は何も言わない、言わなかった。

本来ならば彼女は率先して止めに入るはずなのだが、今回はブレキ役をするつもりもないらしい…少しだが俯いてもいる。

そんなアルスを余所に二人の攻勢はまだまだ続くかに見えたが、

「黙れよ小娘共っ！！」

そんな散々な物言いに相手の兵士はとうとうキレたようだ。

「糞がつ勇者の子供だからってチャホヤされてっからって勘違いす

んじゃねえぞっ所詮小便臭い餓鬼が魔王を倒せるなんて誰も思ひっ
?!!??」

聴くに耐えない低俗な暴言は最後まで続かせないようにする。

まだまだ幼い彼女達…その情操教育的な観点やら精神衛生上、実
に宜しく無いので五月蠅く喚いているソレが着る鎧の前垂れ部分を、
股関との誤差は紙一重の位置を矢で射抜いて黙らせる。

「なるほどな。要所とは言え、常は壁で閉ざされているような僻地
に飛ばされているだけの事はある…器の程度が知れる」

「っ、だ、きさつああ?!」

何か口を開く前に再度、矢を放ち、”矢が刺さっていた”場所を
更に射抜く。

「もう別に口を開かなくても結構なのだが？」

「っひ、ひ…ひいいっ?!」

「元より用も無い…私達は早々に此处を去り、先へ進む。貴様は速
やかにただ任務を全うすればいい」

射抜いたとは言え、特に当ててもなく、ましてや痛みもある訳で
もないというのに情けない悲鳴を上げているのが酷く耳に障るので
意識から外し、視界にも入らないようにしておく。

と、その端でユニとアーリアが感嘆の声を漏らし、目を丸くして
いたので見やった。

「おお〜エミヤン、スゴっ、お見事っ。うん90点! つか、射抜
けば100点なのに敢えて外すその格好良さに痺れる憧れる惚れち

「やいそーっ!!」

「なっ、ちよっユ二っ！ 何どさくさに紛れてっつうん、今はどうでもいいのっそんなことよりもああ…っエミやさま、わたしもその愛の矢で切ない痛みを発するこの胸を射抜いて下さいましっ！」

…いや、まあ何も言うまい。

若干二名いや、一名は態とだから捨て置くとしてアリアが何か不穏当な事を口走っているが聴かなかった事にしておく。

とりあえず、それはさて置いてだ、そんなやり取りの輪の中に入らないアルスを見た。

「…」

気に掛ける風も見せない彼女。

何と言うか、アリアハンでの立ち位置がこれで明確になったと言える。確かに、期待をその背に受けて”勇者”となったのは分かっていた…が、得てしてそれが本当の総意ではないのが現実だ。

妬みや嫉み、嘲りに…挙げればキリがないだろう。

結局、アルスは二人の輪にも入らずに壁の向こうへと歩き出していく。

その後ろ姿を視線は向けずに視界だけで捉えて追う。

「…行こ。予定が遅れてるのは事実だし」

「ええーっ…」

背を向けたまま、こちらを見ずに告げるアルス…それに対してユ二が何故か愚図り始め、

「もちよつとあの馬鹿眺めてようよー」

ただそのやり取りだけで少し、場の固さが綻んだ気がした。

「…そうよ。何か臭つて来たし、長居したくないわ。わたしはアルスに賛成、よ」

「むー…っ」

渋るユニにアーリアがアルスの言葉を後押す。が、余程ツボにハマったのが、一向に足を動かさない彼女の背中を懸命に押していくアーリア。

二人がアルスの後ろをついて行くのを少し見送った後、アンモニア臭を放ちながら喚く兵士に少々キツく一瞥して黙らせて放置し、ゆっくりとした歩調で三人を追った。

…

期待なんかされてない。

皆から望まれる中で”ソレ”は微かに、そして、確かに存在する事に気付いていた。

「…」

それを初めて直に目の当たりにしたのは確か…遺体が入ってない

父オルテガの棺を見送って、剣を本格的に学ばなければいけなくな
ってからの数日後ぐらいだったかな。

あの頃にはもう太刀筋や覚えの良さから、すぐに観れるだけの剣
の型になってたのを覚えてる。でも、幼い上に女だてらに剣を振る
っていたわたしを冷やかす人は多かった。

そして、それは同年代の男の子。

あれは、子供同士の可愛げのある悪口なんかじゃなく、

ひどく具体的だった。

理由は簡単…その子供の親が口にしたのを男の子は真似ただけ、
それがどう言った意味を持つのかを知りもせずに言い放ったのだ。

単身で赴き、命を落とすという愚かさへの無謀さへの罵り…そし
て、嘲られた。

ぬか喜びさせられただ、

期待外れも良いところだ、

そも、そんな愚かな血を引いた上に男児でもない非力な女児なぞ、
と。

気付けば、

手に持った木剣で相手の子供を打ちのめしていた。

お互いに意味を理解はしてなかった、ハズ…でも、いつの間にか
言葉を放った相手をその手で打ちのめしていた。

気付いた後も手は止まらない…止まらなかった。

相手の子供が木剣による殴打の激痛に耐え、必死に謝りながら泣

き叫ぶその声を聞いた大人達が割って止めに入るまでの間、ずっと。

その日から翌日、鍛錬は城で行う事になった。

家を出る時は早朝、帰るのは日が落ちてから夕餉に懸けての人通りが減った夜頃で、往復には護衛の人が毎回一緒だったのを覚えてる…それが、つい一年前まで続いていた。

後で知らされたけど、あの時さんざん打ちのめした男の子とはいつの間にか和解した事になっていたなんて全く預かり知らないし。

言われた意味を理解している現在、今更面と向かって謝る気も起きない…正直、

どうでも良かった。

だから、

「…はあ」

さっきの兵士と、そんな過去の争いの後から稀に向けられるようになったソレと一緒にのも、古傷となってそれを触れながら睨むソレも含めて、もう本当にどうでもいい…と。

何故そう思うのか、切り詰めて考える内にふと思った。

わたしは…

「…」

わたしは、何のた

「だからね、アルス。あんなの気にしたら負けなのよ。早く気持ち切り替える…そうよね、ユニ？」

え…？

「そ。アーリアの言う通り。中に閉じこもってるただの臆病者なんだから気にするだけ損なワケよ、完全にやつかみ。ヘタレは無視無視！」

「…あ」

「…？ アルス？」

「どつたの、アルス？」

…っ！

「あ…っあ、う…うん、分かってはいるんだけど、ね」

「…はあ」

二人に生真面目とか律儀とか言われながら、胸中で自分を戒める。危ういところで、思い止まることが出来たけどあの先は考えちゃダメ、思っても口にもしちゃいけない。

前に、前に進め、止まるな…生きていると信じている、父に会うために、背に追いつく為、追い越す為に、剣を手にとり、魔王を倒すと。

「…姦しいのは結構。しかし、場所的にあまり騒がしくないほうが言いように思っただが？」

幼い日の拙かった決意を思い出し、新たに心に刻む中、後ろからの声に気付いて振り向くとエミヤさんが少し疲れた顔を浮かべて、

松明を片手にわたし達に付いて来てるのが見える。

「ああもー、エミヤんはあ…アルスが悪口言われて落ち込んでんだよ？ 励ましの一つくらい良いでしょーよー？」

「はあ…するな、とは言つてない。だが、此処は通路…壁や天井で限定された狭い場所だ、反響した声を拾った魔物が群れで集まって来るかもしれない。そうは思わないか？」

エミヤさんの言葉に気分がちょっと落ち込む。けど、言ってる意味は正しいし、まさに正論だ。

今はダンジョンの中であり、外に比べれば格段に敵からの不意打ちに対応し辛いのも確かなのだ。

…うん、

「エミヤさんが正しいよ、二人共」

仮にそんな油断したまま曲がり角を曲がった瞬間、魔物と鉢合わせして先手を許して怪我なんて笑えないし。でも、やっぱり少しだけ期待してたから…残念、かな。

「そう、ね。確かにエミヤさまの言う通りよ、ユニ」

「ぶーぶー」

アーリアと二人で彼の擁護に回ると、ユニは白地に頬を膨らめ、口を尖らせてプイツと拗ねてしまった。

「…ちゃんと前を向いて歩け。でないと、躓くぞ」

と、エミヤさんが注意し、

「ふっふーん、甘く見ないで欲しいなあ。そんな柔な鍛え方はしてないのだよ、エミヤんへ…?」

ユニが後ろを振り返りながら、そう得意げに横を歩いていたのが一瞬で視界から消えてった…て、

「あ…?」

「え…?」

最初、言った傍から躓いたのかと下を見るが倒れた姿は無い。そこにあつたのは、ただユニが居た場所にぽっかりと大人二人分の身長くらいの距離の穴が空いてるのみ

「って、ユニいい!??」

「なっ、ちょっ、何やってるのよあの子はっ!??」

大声なのを諷められたばかりなのも忘れてアーリアと共に穴の縁に膝を着いて下を慌てて見下ろす。が、

「だ…だめ…見えないわよっアルス!」

アーリアの言う通り穴は暗く、松明がないと底が見えなくて終わりが見えてこない。

落下死…その事実が受け入れたくない、最悪の事態を予感させた。

「ま、まっ、まさかつ…ユニっ、ユ」

「…いったあああいつ! お尻打ったあああ!」

穴の底から行き場の無い怒りを孕んだ怒号の声だが、いつもの声が聴こえてきた。

そんな怪我をした様子もなさそうな声に安堵のあまり、手を着いていた縁から離れるとそのまま尻餅を着いた。

「…はあああゝ」

横を見ればアーリアも一緒になってぺたんと尻餅を着いて安堵のため息を着いてる。

「よ…良かった」

そう呟くとアーリアに倣い、うなだれて安堵の長い溜め息を吐いた。

そして、

「はあ…これで良い薬になったろう」

やれやれと肩を落とすエミヤさん。

それは、”安堵”というよりも”呆れ”の方が強いのは、仕方ないのかなあ。

「えと…少しは心配した方が」

「あ痛っ?! スライムか、今はスライムっ!? 見えへぶっ?! こ、このっ、こっちが暗くて見えないからってタカ括っててもそんな貧弱な攻撃なんか関係ないんだかねっ、甘いっこれかつ! だあらっしやああああーっ!?!」

エミヤさんに何か言おうとして今度はユニのそんな気合いと言う、

八つ当たりと共にそのスライムが何かが壁に激突したのか、水っぱいものが破裂する音が響いてきた。

どうも、ユニの大声が敵を呼び込んだらしい。

「…元氣ねえ」

そんな声にアーリアの言葉にも完全に呆れしかなかった…正直、自分も言葉がない。

「さて…流石にユニだけが下の階層では可哀想だな。我々も下に行くでしょう」

エミヤさんに賛成だ。ならば、

「すぐに下に降りる階段を」

「いや、その必要はない。ユニっ、松明を下に落とす、落ちた位置から離れろっ！」

「もおお、離れてるっちゅーのおおおっ！」

「え？」

「え？」

そんなエミヤさんの忠告とユニの返事に頭が状況に付いて行けず、アーリア共々疑問符を浮かべていると、

「ふえっ？」

いきなりアーリアの方から彼女の素っ頓狂な声が聞こえ

「つて、え？　アーリアわっはわわっ？！」

そちらに顔を向けようとした途端、いきなりグツと腕を持たれて引き上げられたと思うと、その混乱の内にいつの間にか腰に腕を回されてエミヤさんの小脇に抱えられていた。

自分の今の状態に気付いて彼の反対側を見ると、アーリアも同じく腰に手を回されて小脇に抱えられてる…何て言うか、もう、

「あ、わ、わ、はっ、はわわっ??」

可哀想に見えるぐらいに顔を真っ赤にしてる親友。

「…エミヤさまそんな荷物のようにぞんざいに小脇になんてああでも片手で軽く持ち上げるなんて嗚呼何て遅しい腕いつの日かその両腕の中に私をなあって…あ、でも…ぶつぶつ…そうよやっぱり…ぶつぶつ」

何かブツブツ言い始めてるけど聞こえません…はい、この耳は何も拾ってません。

とりあえずは親友の人間性と今後の友情関係の為、これは幻聴なんだと心に言い聞かせる。必死に。

「あー…まあ、その何だ。この穴から下へ行つてユニに合流するか、着地の衝撃に気を付けていてくれると助かる」

「え、あ…は、はいっ」

エミヤさんも思う所があるみたいだけど正直、アーリア程じゃないけど意識は腰に回されてる腕に気が行つて結構それどころではない。

あと、

「ふふ、うふふっ…んふふっ」

親友が帰ってきません…あ、あーりあゝ？ とりあえず戻ってきて！。

「くおおらあああつ来んなら早くきなさいよおおっ！ でないとおーっ皆が降り来た時いい、この痛みの八つ当たりをおっ、受うけえてえもおらあううぞおお！？」

…はっ？ え、ちよっ、

「何て理不尽な要求?!」

「…それは困る、な。アルス、膝は抱えておくのと下に降りたらアーリアの膝に回復の呪文をかけてやってくれ」

「え、あ…はい」

今にも頭を抱えそうな、変に疲れた表情になっているエミヤさんがそう言つと軽く膝を曲げ、こちらの準備が出来たのを確認したあとで小さく跳躍して穴の中へと飛び込む。

暗さから判断が付かなかったけど意外に高さは無かったらしく、松明の光源はかなり近くて油断してお尻を打ったぐらいで済んだのも頷ける。だが、

「ふんっ!!!」

その眼下に居るユニの暴れっぷりを見る限り

「はっ、逃がすかあっ!!」

…、

「こいつめ、」

…あー、

「こいつめっ、」

…えと、

「こいつめっ!」

ユニの一声一声毎に金属音が響いてくる。

「こ・い・つ・め・っ・!・!・!・!」

眼下には武器を弾き飛ばされ、素手になったさまよう鎧を組み敷いたユニが馬乗りになり、無抵抗のままに殴打しているのが見えた。そして、

「うぁ…」

光源の陰影でその鎧の上半身分がひしゃげ始めているのも見え、松明に照らされて見える範囲では何か踏み潰されたスライム、腹に拳大の跡を幾つものり込ませて痙攣する銀毛のオオアリクイやその他が諸々が無惨な背景と化していた。

「…相当、痛かったのかな」

それを眺めながら着地するまでそんな事をぼんやりと呟く。

「みやつ?!」

余談として、妄想に耽ってたアーリアは案の定、着地時に足が地面にキツく当たって回復呪文を唱える羽目になったのは言うまでもない。

御輿（後書き）

あ、と…プロフィールですが、

長いのが出来そうです（汗

とりあえず、書き終えたら次話にでも単発でも投稿でもしようか
と…その時は気が向いた時にでも見て行って下さい（礼

プロフィール：アルス

アルス…勇者オルテガの一人娘、16歳。

黒髪黒瞳を持つ、本作品でのヒロイン候補の一人であり、三人の中でのリーダー兼ツツコミ役と苦勞的な性格をしている。

父譲りの黒髪は、FC版のカセットに描かれていたような箒のような髪型ではなく、攻略本などに描かれていた父オルテガの髪型を長くしたくらい、耳が軽く隠れるくらいのショートで整えている。

黒瞳は強い意志を秘め、エミヤはアルスの魂を視て、”セイバー”と遜色ないと表現した。

二人と比べて一番背は高いが、女性としての体型をユニに大きく水を開けられており、機会がある度に見比べては胸が憤ましいのを少し気にしている。

アリアハン生まれのアリアハン育ちで、物心が付いてからの大半を父オルテガの背を追う事に費やした為か、気付かない内に若干のファザコンの疑いあり。

第一話の邂逅した時、自分達を護るように背を向けたエミヤの後ろ姿に父の背中を見つけてしまい、これからの道中で何かの拍子に護られ、自分に向けられるその背を見ては物凄くドキドキしたり、顔を真っ赤にする羽目になる。

アリアとは幼なじみ。冒険に出てから初めてパーティーを組んでくれた大切な友人であり、お互いを良く知り合う仲…なのだが、エミヤと出会ってからの彼女の急な変わり様に戸惑いを隠せないでいる。

ユニとはルイーダの酒場での出会いからの付き合いでパーティーを組んで今に至り、冒険者としての経験の多さから彼女の事を先輩として姉分として慕い思っていたのだが、エミヤがパーティーに加わってからの彼女の言動に常に振り回されている。

そんな二人のその病み具合やそれに対する煽りは大きく、今にも心労を起こしてしまいそうな程の苦労人気質な少女。

アルスのキャラを構成する成分は、

士郎3（苦労症）：セイバー3（立ち位置とか）：イリヤ4（父性に飢えてる意味で）

で出来ています。

コンセプトは単純に”普通の少女である”という事です。

”勇者”という肩書きはアルスという人間を囲う壁、アリアとユニ以外では真に彼女自身を見る人間は今のところ、誰一人も居ないことをここに明記しておきます…エミヤはまあ、まだ先の話と云うことで。

プロフィール：ユニ

ユニ…アルスとパーティーを組む、17歳。

栗髪茶瞳を持つ、本作品でのヒロイン候補の一人で賑やかし兼要らん事しいの天真爛漫な性格をしている。

緩やかに波がかった栗髪はセミロングで首の後ろで括り、前髪の一房だけは金髪になっている。

濃茶の瞳は表情以上に多彩な感情の光を帯ており、読めない。

三人の中では一番背が低い、それを補って余りある肢体を持つというチビ巨乳であり、二人からの視線には少なからず気づいていたりする。

生い立ちに覚えがなく、物心付いた頃には既に世界を巡る隊商の一つの中に居り、その中に居た子供らと共に家族のように育つ。

10歳の頃に立ち寄ったアッサラムのルイダで”冒険の書”と契約し、15歳の時に今まで育った隊商を離れて一人、修行の旅に出た。

初契約時の職業は僧侶：なのだが、次第に回復一辺倒な需要に嫌気が差していき、魔法使いに転向する。も、修行の途中で手に入れた”理力の杖”で直接攻撃というものに目覚め、心機一転として武闘家になって今に至る。

結果としては地味ながらも攻撃・防御・回復・補助をこなせる万能型になり、近接による直接攻撃から魔法による後方支援攻撃と臨機応変に立ち回ることが可能。

武闘家になってからアルス達と出会うまでは自己強化を使った戦

闘が基本スタイル。対強敵時は自身に最大強化後、相手に最大弱化してからの蹴撃フルボッコ殴打するのを得意とする。

修行中、隊商の護衛を終えて立ち寄ったアリアハンのルイーダの酒場でアルス達に出会い、素人然の二人を見かねてパーティーを組んだ。

アルスが勇者と知っても変わらず、二人を引っ張るお姉さんのな役をしていたのが、エミヤとの出会いで一転：と言うか、反転。少なくとも出会うまでは単純にムードメーカー然だったのが、彼に惚れたアリアを見て何かに目覚めた模様。

アルスの胃痛原因その一。

ユニのキャラを構成する成分ですが、

藤ねえ7（主に行動や言動）：遠坂2（うっかりと○○）：美綴1（姐さん）

で出来ています。

実に、対エミヤ技能は充実してます。作中でも色々と彼を振り回しますので御期待下さい

プロフィール：アーリア

アーリア…アルスの幼なじみ、16歳。

金髪碧眼を持つ、本作品でのヒロイン候補の一人でアルスを時には叱咤激励し、彼女を支える親友…なのだが、エミヤが来てからは完全に妄想暴走担当に。

金髪は腰まであるロングで首元から腰辺りまでを筒状の布地の中に髪を仕舞い込み、風で舞ってしまわないようにしている。

碧眼はアルスと共に歩み、進むという気丈なまでに固い意志の光を称える…が、エミヤが来てからは彼関連で頻繁に瞳のハイライトが消えたり点いたりする。

三人の中では背の高さは二番目だが、無乳に近い己が胸元を悩み、ユニとまではいかないまでもアルスと同じくらい…少しでもいいから膨らんでほしいと切に願っている。

冒険者となりパーティーを組んだ切欠は、勇者となって近隣で魔物に馴れる為に闘っては傷付いては休みに戻ってくるアルスを見つける度、助けたい思いを募らせる。

そして、ある日にアルスが怪我で起き上がれなくなるという出来事で我慢が出来なくなり、両親を強引に説得し、その足でルイーダの酒場へと向かって”冒険の書”に契約したという経緯がある行動派。

しかし、アルスの境遇や立場、その重圧を見ていた、知っていたのにその踏み出す一歩をすぐに出せなかった自分に少くない罪悪感を胸に秘める。だが、こんな自分でも親友のそんな重責を少しでも

も和らげられるようにしたいとも常に思っている。

そんな中、エミヤとの出会いは少くない変化を起こし、自分達を守った彼に一目惚れする。

以降、若干の病みを醸し出しながら一途に思い、偶に妄想に耽つて軽く暴走したり瞳のハイライト消して暴走したりする乙女？ に早変わりした。

結果、アルスの胃痛原因その二に。

アーリアのキャラ構成は、

慎二2（何かにつけて衛宮衛宮衛宮、桜桜桜）：キヤスター2（今一歩踏み出せない、相手に尽くすところ）：桜6（ヤンデレ具合を前面に）

で出来ています……エミヤ逃げてええー！（笑
…ふう。とりあえず、普段は問題はないけど何かスイッチが入れば、

慎二的思考 ↓ 桜（ヤンデレ搭載）的思考降臨

と、相成ります。

エミヤとの距離が縮まるかは筆者にも分かりません

野宿（前書き）

はい、更新です！

何とか、えっちらおっちらと執筆してます。

では、どぞー m (_) m

野宿

合流後も癰癘を起こしたままのユニとアルス達が道すがら、多少のいざこざを起こしあっていたが別段の問題無く、逆に暴走する彼女が魔物に八つ当たりの突貫をフォローする内、この洞窟に住み着いていた敵の粗方排除が出来た上での最奥…次の目的地であるロマリアへと続く”旅の扉”とやらの前に今、立っている。

「…これが旅の扉というモノか」

それは天井に近い高さから滝のように止め処なく音を立て、大量の水が壁一面に流れ落ちていく。そして、どういった原理か、落ちる水は床を濡らす事も無く唯々その場から消えていた。

源泉の知れない目の前の滝は涸れる気配無く今も流れ続けている。

「ここを潜れば、もうロマリアは目と鼻の先です」

アルスが言うように滝の表面には此処とは違う場所を映し出しているらしく、その先には黄色の扉が見えていた。

さて、潜ると言う以上はこの滝に入る訳だが。

「…ふむ」

正直、あまりにも見慣れない、毛色が違い過ぎる現象に些か化かされている可能性を懸念し、滝の横から見てみるが滝の後ろは正しく壁…やはり、映っている景色は水流に隠れた通路が透けているワケではなかったらしい。

「…本当に滝の水が映し出しているのだな」

「いや、当たり前だって」

この独り言を耳聴く拾ったユニが呆れた顔をこちらに向けてきた。

「…う、む」

こちらに向けた彼女の表情はあまりにも憐憫でその、何だ…あー、ユニ？

「出来れば、その…まるで頭の悪い子を見るような眼でこちらを見ないで欲しいのだが？」

その指摘に彼女はニンマリとした笑みで応え、

「エミヤんが物知らなさ過ぎなのが悪い。だから、うちは悪くないのだっ！」

では、お先いゝつと勝ち誇った表情を浮かべながらユニが最初に旅の扉を潜って行く。

何も被らずに潜って行っただが、濡れないのだろうか？

「…エ、エミヤさま」

…む？

ふとした素朴な疑問を感じているとアーリアが遠慮がちに声を掛けてきた。

「どうかしたか、アーリア？」

「あ、あの…もし何か、まだ分からない事がありでしたら…その…道中にもわたしがお教えしましょうか？」

…ふむ。

「あ、それ良いかもね、アーリア。わたしもちよつとその事考えてたんだ」

「え、あ…そ、そうなの？」

軽く思案しているのを余所に、そのアーリアからの申し出にアルスが先に反応を返し、そのまま二人で相談し始めた。

確かにこの世界の事を知らなさ過ぎるのは問題だ。”繋がったまま”なら元々こんな些事にもならなかったのだが、現状としては好ましくはないし改善する必要がある。

背に腹は代えられない、か。

「そうだな。片手間に、アーリアの都合が良い時にでも宜しく頼みたいのだが…いいかな？」

「っ、はっ！ は、はははっ！ い、イエエ、片手間とは言わずわたしの時間全てで以てエミヤさまに手取り足取」

「ちよつとおーっ、早く来なさいってのおーっ！ 誰でもいいから早く来てくれないと寂しさでうち泣いちゃうぞおっ!？」

焦りからか、アーリアがどもりながらも承諾の言葉を口にしたが皆まで言えず、ユニが旅の扉の向こう側で大声を張り上げたせいで遮られる形になってしまった。

「…」

遮られた当人…アーリアは先程の慌てふためいた表情が形を潜めており、俯いた拍子に前髪が顔を隠してしまい表情は読めない。読めないのだが、

「…あー、アーリ」

「ねえ。ユニ、それ狙ってる？ 狙ってるのよね？ ねえ、態と？ 今からわたしがそっちに行くけど言い訳と事と次第に拗っては非道いわよ？」

…アーリア？

名を皆まで言えずに遮られたが、それはこの際どうでもいい。とりあえず、背筋に冷たいモノが伝ったような気がしたのは何故だろうか？

「んあ…あーにワケ判んない事言ってるのさー？」

「…く、く…くっ、くくくっ…ええ、分かった、分かったわ。そう、そっちがその気なら、いいわよ…ユニ？」

何やら辺りの空気を2→3 ほど冷やす気配を撒き散らし始めるアーリア。

見えない黒いオーラを放ち、旅の扉を潜っていく彼女の後ろ姿をただ見送るしかなかった…その背中では声を掛け辛くさせる雰囲気に伴っていた為に。

「あ…あり？ あ、アーリア…何か、瞳の光が…危つく？」
「うふっ、うふふ…うふふふふっ」

異変に気付いたユニの怯む声と、アーリアの何処か底冷えを感じさせるような含み笑い。

「へ…へうつ？！ い、いやっ、ちよつまっへ！？ ひゃい？ え、あ…いひゃ、いひゃいいひゃいいいっ？？！？」

折檻を受け、切羽詰まっではいる筈だが何処か余裕のあるように聞こえるユニの悲鳴と、

「おゝっほほほっ！ お邪魔虫なユニの類は良く伸びるわねえ！
！」

悦に入った笑いを上げながら何やら嗜虐中のアーリア…何と云うか、

「…とりあえず何をされているかは良く判るな」
「あわ…あわわ…」

横に居るアルスがオロオロとしているのはこの事態の理由を察しているのだろうが、こっちとしては結果は察するが何故こうなったのかは正直、見当も付かなかったのは言うまでもないな。

…

「《ヒヤド》…と、これくらいかしら」

「ん、いい感じ」

ナメした革を何層にも重ねられて作られた革の桶は多少硬いものの携帯性に優れている上に丈夫で、魔法である氷の飛礫を中に3〜4回受けたぐらいじゃビクともしない旅の必需品だ。

そして、

「《メラ》…っ」と

威力を極力下げた火の玉を革桶の中の氷に2〜3回投入。氷はゆっくりと溶け始め、暫くしてホコホコとした湯気が立ち上がってきた、

「…ん。適温、適温と」

手を浸して温かさを確認し、立派なお湯が完成して頬が弛む。

「あううつ…まら、ほっへいひゃいよぉ〜」

横ではユニがしくしくと涙を流しながらアーリアに引っ張られた両頬を手で優しく擦っている。

頻りに撫ぜるので、少々やり過ぎでは？ とアーリアを見やると、

「……そこまでキツくしたつもりないわよ」

口を尖らせて拗ねてしまった。

「…そんなになら《ホイミ》唱えればいいじゃない」

「うう…もっひゃいない」

曰わく、勿体無いらしい。

アーリアが促してもそこを譲らなく、結局は穴から落ちた拍子にぶつけたお尻に關しても《ホイミ》は使っておらず、その延長で両頬の腫れにも使わないみたいだ。

こうなつては手伝うのも強制するわけにも行かないので本人の意見を尊重するしかない。

「…じゃあ、早く身体拭いちゃお？ エミヤさん待たすのも悪いし」

今、エミヤさんは今この空間には居らず、扉一枚を隔てた外にいる。

壁の向こうはもう地上で、陽が沈んだ平野に一人で見張りをしているのだ。

「…もう夜、ですね」

溜め息混じりに呟きながら太陽が沈むのをぼんやりと眺める。

そう、機の悪い事に地上へと出た時にはもう陽は暮れてしまっていたのだ。

「ここからロマリアへは目と鼻の先と言っていたが…」

「あー…やうひゃんにち？ ぐあいかやあ」

「ユニは四半日って言うけど魔物と戦うのも入れると実際は半日ぐらい…です、エミヤさま」

エミヤさんの言葉に頬が痛くて上手く話せないユニが応え、通訳代わりにアーリアが補正を入れて答えたりして至るまでの道のりを教えたりして話した後、

「アルス、どうするの？」

「…んー」

夜通し歩くか否かを決めようとしたんだけど、エミヤさんがわたし達は魔物との夜間戦闘は早いのでは？ という意見が挙がり、確かに一理あると言うことで此処で野営する事に相成った…

「…丁度、ここの空間は旅の扉の部屋と地上とから扉一枚隔ててますし此処に一泊する事にしましょうか」

と、そう言った経緯で今、三人でこうしていそいそと湯水を沸かして身体を拭く準備をしているという訳なのだ。

「あ、あ、あー。あひふえお、あひうえお、あいうえおでかきくけこっ！　っしゃあ、復っ活あーっ！」

いざ服を脱ごうとすると傍らにいたユニが、発声練習した後で何故か拳を挙げている。

両頬の腫れが収まったらしいのは分かった…あー、

「とりあえず、長びかなくてよかったね」

「あゝ…ホントだよ、痛かったしいー、ほんの少しだけどまともに喋れなくてホント辛かったあー」

…確かに。

滑舌が悪いままエミヤさんに喋ろうとして困った笑みを浮かべる彼にアーリアが訳したりしてたし。

「頼戻んなくなったらアーリアの所為だかね」

「因果応報よ…それより本職の前衛が非力なわたしの力ぐらいで痛がつててどうするのよ、情けないわね」

「うちだって最初は後方支援ですー武闘家になって日は浅いですー」

口を尖らせ、ぶちぶちと呟きながら武闘着を脱ぐユニにアーリアが半眼に呆れを込めて呟いたり何やかやと騒ぎながら、お互いに下着姿になっていく。

「二人とも、はい」

「ありがとう」

「あつり」

お湯に浸った布を絞り込んで余計な水気を落として二人に手渡す
と思いいきに身体を拭いていく。

自分も濡れ布を手につくと今日一日の汗を拭っていった。正直、
髪も洗いたいけど野宿でそこまでは望めない。

「はあ…邪魔だあ、これ」

上半身を拭いていたユニが布に包まれた自分の大きな実の一つを
手で軽く持ち上げながらボソツと呟いた言葉にアーリアがモノ凄
い勢いで睨み始める。

ユニは同性から見ても羨ましいくらいに減り張りの利いた肢体を
していて、且つ、武闘家らしい引き締まった身体をしてる…いいな
ー。

「ユニ、喧嘩売ってるのかしら」

完全に目が据わり、問わず確認だけをするアーリア。

この過剰反応から察する通り、彼女のはその…ほっそりしてる。健康的なほっそりだから胸骨とかは浮き出てはなくて、ちゃんと丸みがある。ただ、

「いやいや、未乳には未乳の利点がある！」

「っだ、誰が未乳よっ?!」

その発育がここ最近、3〜4年前から停滞しててストンとして見晴らしが良かったりする。

「な…ななっ、何よっ、そんなデカければ良いってものじゃないわよっ!」

「はっはっはー、大丈夫。アーリアのそのちーちゃんな胸にはまだまだ夢や希望がいっぱい詰まってるさー、目指せ微乳っ!」

「一杯とか言っつてそれでも微!？」

もう、舌好調なユニにアーリアも反応を律儀に返していく…多分、こう反応を返すから向こうも面白がって何度もからかうんだと思うんだけどなあ。

「…」

話題が話題だけに思わず自分のを見下ろしてみる。

お世辞にも大きいと言えない小振りな胸でアーリアよりかは大きい程度しかない…エミヤさんと出会う前、レーベの宿に泊まった時はユニに慎ましいとか言われたのを思い出した。

その場ではどうって事はなかったんだけどベッドにうつ伏せ寝になつてたら、顔に敷いた枕をいつの間にか濡らしてたなあ。

「…はふう」

…あ、ちょっと落ち込みそう。

「あ……ね、ね？」

そんな賑やか？　な感じで身体を拭いてる中、ユニがふと何かを思いついたようにこっちに何か話を振ってきた…何だろ？

「どうかしたの、ユニ？」

「いやね、エミヤん覗いたりするかな……なあんてふと思ってさあ？」

…は？

「いやあエミヤんも男だし、自分で言うのもアレけどうちらって見目良いじゃん？　悶々としてないかなって！」

何と言うか、突飛もないと言うか想像出来ないと言うか。
とりあえず、

「……〜〜〜っ」

今にも親友が卒倒しそうなのはユニのせいだからね？

とりあえず、アーリアは一体何を想像したのか…は何となく想像出来るけど、顔を真っ赤にしていく。そして、その赤みは白い肌へと移っていき、身体が淡い朱に染まっていく様はスゴく艶があつて、今までに見たことない親友がそこにいた。

紅潮した顔に潤んだ瞳、両頬に手を添えてオロオロとするその仕草はあまりに可愛い…て、何考えちゃってるんだろ？

「…まあ言つても？ エミヤン、堅物っぽいし。まず間違いなんか起こらないかなあー」

「んー…ん。起こさないね、絶対」

ルイードでのやり取りから考えれば無いだろう…こっちが勘違いしたりとかでヤキモキしそうだけど。

「そうよっ、起こすならわたし達よねっ？」

「「…」」

「な、何よアルス？ ゆ、ユニも…何よあ、一緒に半眼になってえ…」

主にアーリアとかアーリアとかアーリアとか。

さっきまでは普通に清い乙女みたいに落ち着きなかったのに、もう何か黒くて危うげな雰囲気だし…はあ。

「親友、」

「ホント自重」

「はうつ!？」

ユニとの連携攻撃にアーリアが一気に涙目になったけど、もう放つとお湯によるお清めを再開する事にする。

「うう…何か最近のアルスからの風当たり強くない？」

とりあえず、気の所為だよ? と言っておく。

微妙に納得し切れてない表情で身体を拭いているアーリアを後目に、髪から首筋・肩・腕・胸・お腹…と順々に拭いていく。

「背中拭きたいからお願いい」

しばらくしてユニが背中を向けてお願いしてきた。

丁寧に拭くため、お互いの背中はお互いに拭き合うと約束していたので三人の内、誰かが背中をお願いしたら皆で背中を拭き合う事になっている。

「…」

今日はユニの背中なんだけど。

「ねえ、ユニ…?」

「んあー…?」

アーリアの背中を拭きながらユニが気の抜けた返事を返してくる。

「お尻打ったトコ、ホントにもう痛くないの?」

「…ちょっとジクジクする、ぐらい」

返事に少し、。

「ま、問題ないさー」

間があつた…やっぱり痛むには痛むらしい。

「はあ…」

溜め息一つ着いてお尻に手を翳し、

「《ホイミ》」

癒やしの光を当てた。

「え…？ あ、あつわ、わっちょっとアルスっ？ 勿体無いって！
にやつ？ アーリア！？」

ユニが慌てだしたけどアーリアがこちらの意図を読んで、逃げださないように捕まえてくれた。

これで狙いが外れる事はなくなったので専念出来る。

「どうせ休むから勿体無くないわよ。休めば《ホイミ》分のMPくらゐすぐ回復するから」

「…っ、ううー」

理由が不注意の結果だからか、癒やしの光を当ててるとユニは捕まえるアーリアに身を預けると俯いてしまった。

耳まで赤くなるぐらいなので色々と恥ずかしい様子。

「…はい、おしまい」

「…ほう」

「次、両頬ね」

「え？ うにやつ？！」

油断しきりのユニはそのままアーリアに反転させら、こちらでも少しだけ赤みが残る両頬に手を添えて《ホイミ》を唱える。

「…痛くない？」

「う…う、うん…」

微かに聞こえる返事と、首肯するので動いたのを感じたアーリアが柔らかに微笑む。

「くすつ。こう、情けない失敗しての怪我で《ホイミ》掛けて貰ってる時のユニってホント、普段見る影も無いくらい温和しいわよね」

後ろからユニを抱きすくめていたアーリアはその肩に顔を乗せると、ニマニマと笑みを浮かべ、照れているその顔を覗きこんでいる。

「う、うるさいなあ…」

「…はい、終わったよユニ」

治療が終わった事を告げるとユニはゆっくりと腕を突っぱねて、
アーリアから離れる。

その顔はもう羞恥で見事な真っ赤っかだ。

「~~~~っ、もう早く服着るよっ服！」

しばらくの間、アーリアと眺めているとユニはその視線に堪らなくなったらしく、誤魔化す為に敢えて声を荒らげると後ろを向いて服を着込み始めていく。

それを見ながら、アーリアと軽く笑い合つと自分達も服を着始める。お湯を作るのに使った《メラ》の余波でこの部屋の温度は一応には暖かいけど、下着姿では流石に少し肌寒い。

「あ。食事どうしよう?。」

半ばまで着終えたユニがふと呟く。

「…一応、旅の扉側には聖水撒いてあるんだよね? 地上の方はエミヤン見張つててくれてるし」

聖水とは教会で司祭様により一昼夜を掛けて聖別処理される水の総称で魔物を遠ざける力を付与してくれる物だ。

冒険には欠かせないアイテムの一つだけど、ここ最近魔物の活発化が一途なせいで需要が高まってしまい、最初は無償提供だった物が過去に各地で司祭様が過労で一度ないし倒れたのをキツカケに有料になり、教会が頑張つて供給するも全く追いつかず品薄状態になっていたりする。が、

「食事の時には地上側の扉前も聖水を撒いちゃえば見張りは無くてもいいんじゃないかな?。」

実はアリアハンの場合は周辺の魔物があまり強くないのもあって未だそこまでには至ってなかったりする。

それもあるって逆に加工された魔力水晶と外の大陸にある教会に”キメラのつばさ”で届けたりしてるそうだ。

「…かなあ？ うん、やっぱりご飯はみんなで食べないとねー。火は使う？」

「使いたいけど…これ以上煙たくなるのは嫌よ」

「…あー」

アリアの言う通り、地上がすぐ隣で空気は流れているとは言ってもこの部屋は既に松明の煙が若干籠もっていて煙たい。

「今すぐにも扉開けて《バギ》っていい？」

改めて室内を見回していたユニが唐突に突飛もない事を言い出す。

「いや、多分そんな事したら事情知らないエミヤさんが何事かって入って来るよ？」

皆、今の状態は下着姿ではないにしろ、それでも殿方の前に出れる姿ではない。

わたし達が居る部屋から魔法が放たれれば、事情を知らないエミヤさんは躊躇なく中に入ってくるのは明らかだ。

「そんな時は、きゃあ〜っ！ って叫びながら魔法の集中攻撃っしょ？ うちの《ギラ》唱えるからアルスやアリアは《メラ》お願い

ね」

いや、無事かどうかを確認する為に入ってきたエミヤさんに対してその仕打ちはあんまりだと思う。

「却下」

「…じゃあ、《ヒヤド》？」

「それに対しての却下違う！」

「…要は、さつさと服着てエミヤさまを呼べば特に何も気に掛けなくていいんじゃないかしら」

え？ あー…、

「確かに…そう、ね」

アーリアに指摘されて今更ながらそこに気付く…あうう、思った以上に冷静ではなかったみたいで恥ずかしい。

「てか、当たり前っしょ」

今までのやり取りが無かったかのように、さも当然のようにユニが言う。

どうやら又、態とのようです…お願いだからユニはもうちょっと自重してほしい、うん。

野宿（後書き）

ゲーム内だと野宿も何もあつたもんじゃないけど、やっぱり実際はこーいうのもある訳で。

ちよくちよく現実的なモノを組み込んでいきます…ので、こんな
のドラクエの世界観じゃねえっと一蹴されるかもですが、今後とも
温かく見守っていただこう、よろしくお願いしますゴーンΣm（

――;)m

月下（前書き）

更新です。

リアルが忙しく、ひと月余計に掛かってしまいました…別にリアルとかでないんで悪しからず。

次回はいつも通りの、ひと月後に更新出来ると思いますのでこれから宜しく願いますm（―）m

では、タイトルで『月下』…どうぞー

月下

ふと、

”…一言で言うなら、とにかく雑でした。”

彼女がその頃の、自国の料理について確かこのような表現だったの思い出した。

「…」

「…」

「…」

”雑”…ある意味、ヒドく曖昧な表現ではあった。が、今なら的を射ていたのだと実感する。

「…えと、エミヤあん？　おーい？」

保存を優先するためだろう、水気の一切を飛ばした、フランスパンなどはまだまだ柔らかいと嘲笑う程に堅いパン…触れた瞬間、これは凶器か？　と過ぎたのはこの際どうでもいい事にしておこう。

「あ、あの…エミヤさま？」

その”凶器”に挟む、肉…保存の仕方が悪いのか方法が確立されていないのかは判らないが、これは…

発酵しかけている。

発酵、醗酵か…確かに学術的には腐敗と同列だろうさ。だが、肉類には無関係だ。

そして、彼女らの調理の跡…香辛料で誤魔化されてはいるが、この舌を擗潜るには精進が足りないイヤ、これは逆に褒めるべきなのではなかるうか？

少なくとも努力の跡は見える上に、まともな素材ならばと甘めに見たとして及第点を与えてもいいかもしれん…いや、違うな。

「…エミヤ、さん？ エミヤさん、エミヤさんっ？」

このスープも、戴けないな。

やはりと言うか、保存の為の塩に漬かっていたであろう野菜を使ったもののだが、煮ただけでは駄目だ…ああ、やはり、とてもではないが及第点を三人に上げる訳にはいかないな。

そも、三人も既に年頃の女性…料理の一つや二つを出来ないでは

「エ・ミ・ヤ・んって、ばっ…！」

…っ、む？！

突然の強い語気と身体の揺さぶりに我に帰るとアルス達の訝しげな表現が視界に入ってきた。

何やら食事の手を止め、こちらを注視している。

「…どうかしたか、三人とも」

「いや、どうかしたかったのはエミヤンだっば…」

呆れるユニの言葉にアルスとアーリアが同時に頷く。

どうやら、

「エミヤさまがパンとスープ…それを見た時に顔が強張りまして、えと…パンを一囃りにしてすぐにその、眉間に皺が入りまして…スープを口にした後は動きが止まってました」

料理の見た目や現時点の時代から素材の保存方法を鑑み、一応には覚悟はしていたつもりだったのだが、

「エミヤんてば、なんじゃこりゃー…て顔してたよ？」

思った以上にショックを受けていたらしい。
安く見積もったわけではなかったのだが…見誤るとは。

「…エミヤさん、もしかして野宿は初めてとか？」

「いや。宿などで一夜を過ごすのは稀の中の稀…平野や森は言うに及ばず、山岳、洞窟に砂漠や雪原もある。森に関しては木の上や洞の中、山なら切り立った崖にロープ…縄を身体に対して張っただけのこの身一つの状態で一夜を過ごした事もあるぞ」

「…」

「…で、何がその…エミヤさまの琴線に？」

雪原辺りから絶句したアルスとユニだが、アリアは思い止めれたらしく理由を訊いてくる…理由など明白だ。

「味の雑さにだ」

「…味、ですか？」

手元を見る彼女に、復活した二人も自分達の手元を見やる。

ユニはその小首を傾げながら、

「味って…これ普通でない？」

と、呟く。

「え？ う、うん。炙った干し肉に香草を挟んだパンにスープ…ちよつと張り切りすぎたかなって思ってたんだけど」

「そう…よね？」

アルスもそれに同意し、アーリアも一応には困惑げな表情をするも、さも普通という感じに頷き合う二人…いや、だがな？

「もう少し、味を考えたモノをだな…」

「で、ですけど…あんまり手の込んだ料理は不向きですし、調理も手間の掛からないモノにしないと匂いに釣られて魔物が寄ってきてしまいますよ？」

…確かに正論だ。

「…むう…」

まず、火を使う料理は合理的に考えてみても論外だろう。確かに、状況にもよるが匂いに釣られた害獣に襲われるなどといった事態は避けなければならない。

火を使わないモノ、使ったとしても匂いの立たないモノ…調理済み・熱加工済みのレーションや匂いが少ないオートミールがその代表だろう。だが、この”世界”にはそう言ったモノはない、有った

としてもそんなものを出すのを認めんし出させない。
それも含んで兎に角だ、

「これはあまりにもお粗末すぎると声を大にして言いたいのだが？」

お粗末…それを聞いたアーリアは少し落ち込み、ユニが不機嫌になる。が、アルスが何かに気付いたような表情を見せると

「…あの、エミヤさんって料理出来るんですか？」

そう訊いてきた。

彼女は少しばかり驚きを含んだ目でこちらを見ている。

「…苦手ではない」

そう、苦手ではない…必要に迫られたのでそれを身につけたワケだが、そこに妥協などない。

飽くまでも作るからには納得が行くものを作る…決して”姉貴分や妹分”の喜んだ表情が見たかったとかではなく

「へー…？」

…む？

思考が妙な所に沈みかけたところでユニからのそんな、何やら含んだ声にそっちを見やる。

普段なら気にしないのだが料理に関しての話をしていたのもあり、こちらを見やる目線が何処か昔に見たもののように思え、応えてしまったのだった。

…

「…ふむ、何やら言いたげなようなのは気の所為かな？」

エミヤさんが敢えて訊いてみたという風にユニに訊いてきた。けど、

「別に…？」

ユニは何故かはぐらかす…えと、はぐらかそうとしてるんだよね、その割にその訝しむ目はどうかと思うよ？

「……いやあ、何てえの？ 男連中つてのはさ、料理出来ないってのが常識なんだよね、だからエミヤさんが？ って思ってたさー」

…ゆ、ユニっちょっ！？

その明らかな上から目線にちよっと動揺してしまう。

確かに男性が料理をするというのは先ず聞かない…少なくとも、わたし達の国は。けど、それを挙げたらうなんて。

「…ほう？ それは自分は料理が出来るという口振りだな、ユニ？」

「へっへーん、うちは女の子でふふあらあふえー」

と、パンを口一杯に嚙じらせたまま腰に手をやって胸を張る…ああ、会話の最中にパンを頬張っちゃったら行儀が

「行儀が悪いぞ」

…はい、その通りです。

こちらが言う前にエミヤさんから注意が入った。

「つぐ、んつくん…つと、ふうー。いやあ、うちだって出来るし、
アーリアやアルスだって。ねー？」

正直、当事者同士を諷める役とタカを括ったのに何でそこそこ
うちに振るかなあ。

「…まあ、人並み…かな？」

本当に出来るっていう程度…思えば、剣振るったり魔法の練習が
殆どだったと振り返

「…てりょうり手料理…エミヤさまに、わっわたしの…てっテリョ
…きやああーそんなあ美味しいだなんてえゝゝゝ」

…つて、おおー！？

わたしの端で感じた異様な気配に振り返るとアーリアが身悶えし
てた。

「っ…なに、アーリアのビョーキがまた始まったの？」

…あ、あーりあゝ又ですかあ？

横でクネクネと身を振りしきっているアーリアにユニがビクツと
した様子で見やっている。

かく言う自分もちよつと腰が引けてたりする…だって、何だか怖

いし。

「なるほど…相当な自信があるようだな」

「わあーお…華麗に無視したね、エミヤン」

本当…あ、

「わ、わたしは人並みなんだよっ？」

と、エミヤさんに主張するが、

「ふむ…言うのも何だが、皆の料理の腕に関して興味が出てきたな」
変に興味を持ってしまったみたい…うー、わたしは人並みなのに
っ。

「うちもあるかな、エミヤンの料理…ま、あんまり期待してないけど」

…ゆ、ゆにつ何煽ってんのっ？

「フツ…余程の自信があると見えるな、ユニ？」

「ふふ〜ん。伊達や酔狂で世界を周ってなかったかかねー、料理は身内で一番だったし」

「ふむ…」

ここから舌戦が開始されるのかと思ったけど、何故かエミヤさん

がふと黙ってユニを見やり始めた。

「…な、何さ？」

ジツと見つめられてか、ユニの頬が薄ら紅く染まっていく…が、

「いや何、その割には栄養に偏りが極端だったのか寸足らずだなと思っただけ」

続くエミヤさんのそんな言葉の所為で何か色んなのがぶち壊れたって、ちよつ？

「エミヤさんそれユニには禁句」

「…はっはっはーっ…」

そう指摘した瞬間、ユニが笑いだし、ビクツとしながらそちらを見やると顔が怒りを称えた笑みという器用なモノになって

「エミヤんだって良いもん食ってないからそんな斜に構えて皮肉言ったりするヒネた大人になったんだよー」

げっ。

うん、あんまり汚い言葉は使いたくないけど敢えてここは言わせてっ！

「…」

「…」

「あ、あう…はうあううゝゝ」

アーリアの悶え声を背景曲にエミヤさんとユニがジッと睨み合っている。と、

「……クッ」

「……ハッ」

全く同時に笑う。

正直、何が面白くて込み上げてきたのか何故漏れ出たのかが分かりません、笑う所じゃないと思う。

食事の席なのに、何だか戦闘中のような空気を感じて若干震えているのは自分の感覚は正常だよね？

「フッ…受けて立とう。そして勝った暁には今後は私が作り、日々考え抜かれた栄養割合の料理で以てその背を伸ばしてくれる」

「そっくりそのまんま返してその捻た根性を叩き直してくれよう！」

とりあえず、せっかくの晩御飯なのにスープが冷めてしまったのが少し淋しいなあとか思いながらパンにかぶりつく。

「くつくつく…」

「はぁっはっはーっ…」

何かが極まった二人が互いに互いを上から目線で見やりながら笑い合うのが変な感じだ。

「ああ…パンが固いなあ」

そんな、少し顎に疲れを感じながら一人で黙々と食べつつ、遠い目で他三人を見て溜め息を着いた。

もう、放置で良いよね？ そうしょ。何かしようにもね、わたし

のHPはもうゼロなんです、あとはもう当事者同士で勝手にして下さい、です。

「はふー…」

ハイもう、ドツと疲れた…疲れしました。

ただただ夕食を食べていただけなのに疲れがパンパンに溜まりました。

あれからも夕食中はユニもエミヤさんも目が合う度に、フツ…とか言い合って不敵に笑い合うし、それをアーリアが見ては何か黒い雰囲気醸し出しながら何かブツブツ呟いてるしで全然、味なんか分からなかったよ！

「…うう…冒険での数少ない娯楽なのに」

夕食が終わったら終わったで、見張りをどうするかをエミヤさんが、

「自分が立つ。アルス達は朝まで寝てていい」

と言い始め、そしたらユニが、

「やぁん。エミヤんたら、うち達が寝静まったのを確認したら夜這いする気なのねっ！」

とか変な事言うから、

「っよ！？ よっよばっばっよば夜這い！？ わっ、まっお待ち、お待ち下さいましっわたしこ、心のじ、準備がああっ…！」

アーリア、今日一番の大暴走。

宥めるのに四苦八苦しつつ、やっとの事で就寝までたどり着いたわけですが。

何だかね？ さっき、お腹がキリキリしてきて、気になったからホイミ唱えて、そしたらすぐに痛みも治ったんだけど…

「何だったんだろ？ …はあ…」

「くー…」

「くかつ…ずぴー」

その何度目かの溜め息への返事が如く聞こえる、わたしの両隣からのアーリアの寝息とユニの鼾。

エミヤさんが寝ずの番をしてくれる為、気兼ねが無いからって二人とも眠りが深いらしい。

「むうう、二人してぐっすりとお…」

旅を覚悟して、アリアハンを離れた以上はもう熟睡なんて出来ないんだと思ってただけだなあ。

聖水は有限、魔物は際限なし…人間には、眠気がある。

その事に

「…エミヤさん、大丈夫なのかな」

例外は、無い。

別に、彼のあの強さを信じていない訳じゃない…けど、やっぱりまだ日が浅いから妙に気になってしまう。

「…よし」

意を決すると音を立てないように身を起こすと、外界へと出る扉を振り向いた。

”旅の扉”側は二度目の聖水をエミヤさんが撒いてくれたので注意する必要が無い…その為、見張りは外界側のだけ。

「…どうせ、まだ眠くないし」

「すー」

「ぐー」

そう呟くと、ゆっくり慎重に寝袋から出る。

身嗜みを確認すると鎧とかは着けず、エミヤさんから譲り受けたアゾット剣だけを手に取り、外への扉を開けた。

「っ…ん、夜は…少し、肌寒いかな」

寒期はまだ先のはずなのに、暖かかった洞窟から出るとじんわりとした寒さが徐々に染みて来て、

「……………？」

その異常に気付いた。

「エミヤさん？」

…え、居ない…？

「っ？ ど、何処に行っ？！…」

言葉を皆まで言えず、突如として発生した、外気の寒さとは違う寒気が背筋に突き刺さった。

「…っ、これ、まさか魔物のっ!？」

押し潰すような威圧感、突き刺さる殺気。

それらが放たれている方向、感じた方に身構え、剣の柄に指を掛けながら視線の先…木々に阻まれた昏い森が広がる、その更に向こうをキツと睨んだ。

「…」

睨み、

「……」

睨んで、

「………」

睨み続けて、

「…?」

気配が一向に近付いてくる様子がない事に気付く。そして更に、その放たれる威圧感や殺気に

「エミヤ…さん？」

覚えがある事に気付いた。

そして一度、洞窟内に戻って荷物を静かに漁り、過去に使った聖水の残り集め…雫の水滴をかき集めて置いた、いざという時の”もしも”用の聖水を取り出す。

「っ…と」

外から、扉の前にそれをしっかりと振り撒くとエミヤさんが居るであろう、森の奥へと向かった。

森に入っすぐ、

「っ…？」

魔物の死体らに会合していく。

それらに竦む足を叱咤して更に奥に進む。その向かう先々には魔物の死体、死体、死体…既に両の指では足りない程の魔物達が物言わぬ姿に変えられていた。その内、

エミヤさんは集まってきた魔物と戦っているのだろうか？

と、そう気に掛けていき、結論が出る前に森の終わりが見えてきた。

「あ…居た」

終わりだと思った森の縁は、ただ一旦拓けただけの場な様で、その遮るモノに邪魔される事無く照らされた月明かりの中で、エミヤさんはこちらに背を向ける形で静かに佇んでいた。

「…」

…エミヤさん？

その佇む後ろ姿、その身から湯気を立ち上げながら、両手に二に持たせてる筈のあの双剣を手にするその背は、

「……………」

視線を釘付けにして離さなかった…そうして、ただ見続ける内、

「あ」

「ふ…っ…!!」

エミヤさんが動いた。

月明かりの下、白と黒の刀身は月の光を浴び、その軌道は残像となつて軌跡を残し、まるで付き従う帯の様に見える。

「…っ……………」

息を呑んだ、何とか呑み込めた。

その構え、その太刀筋、その体捌き…例え双剣だとしても彼が行っている剣の型は見たことがなかったし、お城で教えてもらったどの剣の型にも見ない程の何処か歪な太刀筋や身体の捌き、剣の軌道に違和感を感じる。

しばらくして歪な太刀筋は受けを前提にした攻めなんだと解り、それを前提に見る内に、気付けば剣の軌道は攻守が入れ替わっているのが何故か解った。

身体の捌きとかは必要最低限のそれではない…それらは十重二十重の”何か”を感じさせ、何処か未完了を、何故か泥臭さを思わせる。

そんな風に思いながら、エミヤさんが舞つのをずっと眺めてて

「綺麗……」

そう呟いた。

” 舞う ” …… そう彼は舞っている。

” 剣の舞い ” としか表現出来なかった。

目が奪われていく…意識が、集中力が、全て目の前のエミヤさんの体捌き・太刀筋に心奪われていく。

自分達の遙か先、自分が目指す遙か先…この身が至れるかも判らない舞台の光景。

「ふう…」

舞いが終わり、また佇む背を眺めた。

遠目から見ても判るような自分よりも大きな背中…間近でも見たあの、父のように大きな背な

「明けてすぐに発つなら、今はちゃんと寝ているべきだと思うが？」

え…

「あ、……… わっ、え、エミヤさんっあ、あああのっ」

いつの間はこちらを振り向いたのか、エミヤさんがこちらを見て苦笑いを浮かべている。

それにビククリしてわたわたあたふたと右往左往としてる内、

「盗み見、というのもあまり感心しないな」

気付いたらエミヤさんがもう目の前に居ました。

どうしていいか判らず、見上げると彼は溜め息を着きながらこちらを見下ろしてる。

「す、すみません…眠れなくて」

「横になって目を閉じているだけでもかなり違うものだぞ」

「あ、う…」

段々と視線に耐えられなくなり、目を逸らしてちょっと俯いてしまっ

「別にイジメてるわけではないのだが、な。ふむ」
「あ」

頭を撫でられた。

小さな子供にするような撫で方、何か不器用な…撫でられて、なで…顔が、顔が熱いつ？

「む…顔が紅いが」

はっあっ？！

「な、何でもないです！ ないですから額は当てないで…！」

「そ、そうか…なら、いいんだが」

あ、危なかったっ。

エミヤさん、すぐ片膝着いて目線の高さ一緒でしたっ！

「戻って寝た方がいい…この辺りの魔物は粗方は片付けてあるからしばらくは安全だ。一人で戻るだろう」

立ち上がりながらエミヤさんはそう言うと又、拓けた場所へと戻っていく。

「あ……う」

その後ろ姿に声を掛けたかった…けど、その背中は暗に早く戻れと言われてるようで声も掛けられなかった。

もう少し見ていたかった…でも、エミヤさんに見つかってしまったて、注意を受けた以上は戻らないといけない。でも、

「…」

そんな、

「……ふ」

アーリアとユニが眠ってる洞窟へと戻る中、何故か、

「ふふっ……」

その帰るまでの間ずっと、頬が緩んで緩んで仕方なかった。

月下（後書き）

さてさて、懸念材料だったエミヤのレベルスピードですが、

鍛錬を欠かさないエミヤなら、深夜とか未明に独りで三人から離れる序でに野営を中心に周辺のモンスターは掃討するだろうという感じです。

経験値配分はパーティーの頭数割りではありませんが、直接仕留めた場合は幾分か割り増しになる感じでいこうかと思つてますので、旅の途中でエミヤのステータスが他三人よりも出遅れるような事はマシになります。

では、長々とするのはアレなので今回はここまでで。ではでは

厄介事（前書き）

約…2ヶ月ぶり？ ですね…

すっませんっした！ゴンツΣm（―――∴）m

自分でもワカらない…いや、執筆してるんですよ？ ちゃんとストックもあるし。

…。

とりあえず、『厄介事』です。

では、どぞー。

厄介事

夜が明けてすぐに野営を片付け、霞掛かった中を発ったのと昨夜の”掃除”も手伝ってか特に何事も無く、目的地であるロマリアの南門へと辿り着いたのは領内の家々から朝餉の準備による煙が煙突から立ち上っている時間だった…のだが、

「…やけに物々しいな」

門の手前、そこでは統一された武装を着込んだ数多の兵達が幾つかの檻馬車を中心に編成を整えているという光景が先ず、こちらの視界に入ってきたのだった。

恐らくは今、目の前の兵達が件のロマリア兵なのだろうが…

「えーと、多分…魔物の捕獲部隊だっけかな。ロマリアはコロシアムがあつてさ、そこで魔物同士を闘わせる見世物があんの。それじゃないかな」

「…市井の娯楽の為、か？」

こういった娯楽は、圧政から民衆の目を逸らせる為のスケープゴートに使われる常套手段だが、この世界の場合なら魔物からの不安と言ったところか。

確かに民への娯楽を満たし、その為に周辺からの魔物の捕獲を行えば一石二鳥と言える。

「詳しくは知り得ませんが…現ロマリア王は熱狂的な観戦者だとか」

つまりは、国政が趣味と実益を兼ね備えた結果という事か。

「ふむ…要は、時勢が合ったのだろっな。本来なら娯楽に現を抜かす王と呼ばれるところだが、迫る魔物の脅威を排し尚且つ、娯楽へと転換すれば民の支持も受けられる…差し詰め、賢王と称されるところか」

「うあー…流石エミヤン、キッツいねー」

批難の割にはニヤニヤするユニ…表情から、彼女もそう考えていたようだ。

「あ、出撃するみたい」

アルスの言葉通り、ロマリア兵達が動き始める。

城壁を迂回して北に向かうのを見るに、南門に展開していたのはアリアハンとの国交が途切れているからだろっ、必然的に北門は人と物流が集中する為に大部隊の編成を敷くには無理が出てくる。

そう、手慣れた感が判る程に”長い”と言うこと。

「…アリアハンからの人間は領内に入れるのか？」

懸念材料を挙げてみると、アルスは懷から蠟封された羊皮紙を取り出した…それは？

「アリアハン王から親書を届けるよう言付かっていますから。あと、勇者が…わたしが旅立った事は各地に伝わっているようですし大丈夫ですよ」

多分…と敢えて小さく零したが、この耳は逃さなかったし、

「ま、大丈夫つしょ？」

「でも、万が一よね。もし、無理だった場合はカザーブか…西のポルトガ、東のアッサラムまで行くしかないわね」

ユニやアーリアも聞き逃さなかったようだ。

勇者だ何だと肩書きはあるが、それはアリアハンでの立場ではない…それが外の国に通用するのか否かは、この場では解らない。ならば、

「とりあえずは門に向かわなければ始まらんという事が」

「そうですね…うん。ここで考えていても仕方ないですし、行きましょうか」

「っん。よし今日はふかふかベッドだあー」

「魔力水晶の浄化が先でしょ！　って、教えたのユニじゃないの！」

そだっけ？　そうよ！　と言い合いながら歩くユニとアーリアの後ろを微笑笑を浮かべながら付いていくアルス。

「…朝から賑やかな事だな」

そんな三人を眺めながらそれに続いた。

…

「…賊の、討伐？」

人を相手に戦え…そう言われた。

一抹の不安はあったりしたが、すんなりと領内に入れた…んだけど、門で衛兵に親書の事を伝え、自分がその勇者だと告げるや否や伝令を城へと走らせた。

待つように言われて、暫く待つてると今度は高官らしき人に王城への召喚を言い渡された。

ユニ達やエミヤさんと伴って行こうとしたら、高官は勇者である、わたしだけを名指しして来るように言われ、連れられて今、ロマリ秦王の前に傳えている。

「そうだ。その賊は一巡り前にこの城へと忍び入り、宝物庫から余の”金のかんむり”を盗みだしたのだ…魔物の捕獲によって守りが手薄になる日を狙つてな。”金のかんむり”は戴冠の折り、ロマリア王家に代々受け継がれる由緒ある王冠…それを盗んだ罪は万死に値する！ アリアハンの勇者…いや、余はまだお主を勇者と呼ぶ気にはなれない。アルスよ？」

「…は、はっ」

勇者と呼ばれないだけで、その少しの嬉しさからでもってしまふ。

「アリアハンとの国交は表向きは長く閉ざされたまま、それは今に至るうとも変わらぬ…これは、その流れを変える一步となるう。アルスよ、そなたの力に期待している…見事、成し遂げて勇者として

の証を立てよ！」

「……はっ、必ずや！」

一際、声を張り上げて応えたと立ち上がり、外套を翻すように踵を返して謁見の間を後にする…沈む気分を無理矢理に奮い立たさせながら。

長い、長い廊下を進みながら、

「…結局、勇者の肩書きは必要とされちゃうのか」

大窓から注ぐ陽光に照らされる廊下を進みながら一人ごちる。

…重い、

今、人々は勇者を求めている…勇者は偉業を求められる、それを成すことを求められる。

…重い、

成せばならぬ、成さなければならぬ。そして、

…重い、

成されれば、

…重たい、

自分は”勇者”と呼ばれるようになる。

「重たいよ…父さま」

立ち止まってそう呟くと、徐に大窓を見上げた。

そこから、雲一つない青空を見る。

青くて高いその大空を鳥達が元氣良く飛んでいて、それが気持ち良さそうで。

「ふう…」

ゆつくりと頭を振り、我知らず両肩を抱いていた手を力無く降ろすと止めていたその歩みを再開する。

ちゃんと前を見据え、背が曲がらないよう不自然にならないよう、肩を張って玄関門を目指す。そして、切り替えた頭でこれからどうするか、指針を幾つか見繕っていく。

一つは、賊の宛て。

入り込んだ賊は出兵の合間を縫って来た以上、手練れに間違いない。なら、今回が初めての筈が無い…ここ最近でそれ関係で賑わせている賊の名を絞り込んでいかないと。

次に、足取り。

事の起こりは一巡り前…行く先は三つ。

北のカザーブと西のポルトガル、東のアッサラム。

ロマリア王の話に拠れば、西と東は各関所を通らなければその二国には入れないと仰られていた。なら、

「北のカザーブ…」

確か、更に北はノアニールと言う街があるとも。

とりあえずそこまで至って、一人頷くと歩を速める。盗まれてから日にちがそれなりに経ってしまってる以上、のんびりとは出来ない。

「…あんまり、良い顔しないだろうなあ…」

ふと、説明した時のアーリアとユニの表情を想像する。

アーリアは不機嫌に眉根を寄せて批難したり、ユニならキツ目の文句を口にするに違いない…だって全部、わたしを思ってたの事だから。

「…エミヤさんはどうだろ？」

特に、何も言わなさそうっぱい？

やはり何気に日が短いから何とも言えないところ。

「ま、王の勅命だしね…選択肢なんて無いよ」

そう締め括りながら外へ抜け、門を潜り、城下に下りた。

「フツ…自らの失敗を他人に丸投げとは、な。事情を知らない此方としては見計れないのも無理は無い、向こうにとつての丁度良い時に体の良い駒が来たという訳だ…やはり、この国の王は本質的に暗愚だな」

うん、予想外です…説明した瞬間、エミヤさんの開口一番は痛烈な批判でした。

「いやあ…ヤな予感当たったなあ」

「当たって欲しくなかったわよ」

ユニがぼやき、アーリアが呟く。

わたし達は今、今夜泊まる予定の宿屋に居り、その中の食堂で今日の事を話したんだけど…みんなの予想以上の反応にスゴく肩身が狭くなる。

「えと…何か、あったの？」

「…実はさー」

ユニが言うには、何でもあの後に街へと入る許可が降りて三人は街中を色々見て回ってたらしい。

その時、最初に寄ったのが闘技場なのだがそこで”あるモノ”を見つけ、その事について周りから話を訊いたそうんだけど…その内容が、

「一巡り前から急遽、国賓用の観客席を建てて今日出来上がったばかりだそうだ」

一巡り前…その言葉を聞いて何かを察し、口の端が軽く引きつちやっただけの言っただけでなく。

「どうやら、その莫迦はそれまでに何度も城を抜け出しては護衛も付けずにお忍びで観戦に来ていたらしい…で、今回の件だが、賊が入ったというのがそれは出任せだ。恐らく護衛も付けない阿呆が件の賊に捕まり、脅されでもして、巡回を避ける為に王族にしか知らされてない避難用隠し通路かそれに準じた何かを用い、そこから宝物

庫まで御招待したのが事の真相だろう」

頭を抱えた。ついでに何か、お腹の上辺りがチクチク痛いけど今は無視しよ。

《ホイミ》したらどうせ治るし。

「正直、由緒あるモノってのも怪しいわね」

「どうせ、逆恨みとか面子だのとか？ そんな碌でもないのだよね」

つまり、これは余計な厄介事を引き受けてしまったという事。

「…みんな、ゴメン」

わたしは腰を上げると縁に手をつき、テーブルに額が着くまで頭を下げる…みんなの顔が見えなくなるけど、これは会わせる顔がないよお。

「謝る必要はない…これは、まず避けられなかっただろう。アレの命令はそれを引き替えに領土内を円滑に移動出来るよう約束したようなモノだ…もし断った場合、どんな弊害が出るかは容易に想像がつく。この件でアルスに非は無い」

ため息の後でエミヤさんがそう言うと、頭を上げれない自分の後頭部に暖かい温もりが現れた…あれ、もしかしてエミヤさんがまた撫でてくれてるのかな？

「あ…いいなあアルス」

「おっとー…アルスが一步優勢かあ。ね、アーリアはアルスになら

負けてもいいのかなあ？」

えと…。

「……こ、今回だよ。今回は目を瞑る」

…。

「ふーん。目、瞑るんだ…じゃあ、エミヤあん？　うちも撫でてっ
み？！」

「あら。あなたは”今回”に入っていないわよ、ユニ？」

「お、おおおっ…おあ、ああ頭っし、締まっアタマわ割れ、ワレえ
ええっ???!」

…。

「やあねー、そんなに力入れてないわよ。それにわたし魔法使いだ
から力は無いわよ？」

「し、しめたらでるっ餡がでるって！　あんこでるあんこでるうっ
うっつ?!!」

…。

アーリアとユニのやり取りが聴こえるけどこっちはそれどころじ
やありません、頭を上げませんっ上げれないからエミヤさんの手
が止まりません！

つまり、

顔が上げれない↓エミヤさん頭撫でたまま↓恥ずかしい、けど気
持ち良くて顔上げれない↓だから、頭下げたまま↓エミヤさん（以

下略

うん、今、優しく撫でてくれる所からを中心に暖かいのが広がってきて、顔にも広がってて紅いのが自分でも判る…絶対に耳も紅い。

「…イミ」《ホイミ》《ホイミ》《ホイミ》「！」

「もおユニったら大袈裟過ぎ…だから、わたしはそんなに力の値は高くないわよ」

撫で続けられること、数瞬？

そろそろ、頭下げる為に着いた腕に力が入らなくなってきましたあ…何て言うの？ 力が抜け…あ、何か頭がポオ〜と…う、うー？

「うにうー…」

「…さて、」

…あ。

もう身も心も委ねようとした時、機会悪くその温もりが離れてしまった。

「これからどうするか、だが…魔力水晶は浄化済みで換金も済ましてある。後は、装備の買い替えだが…武器に関しては現状のままで行けるのはここまでの道のりで分かっているので、先ず差し当たっては防具だ」

「……………ん、ふう…そうですね」

エミヤさんの言葉を聞き終えてから顔を上げる…すぐには顔が上

げなくて、とりあえず赤みが引くまで上げなかったのが理由です。

「…エミヤさまが下さった武器みたいに又、作っては駄目なのでし
ようか？」

「厳密に言えば有るには有るが、期待に添えられるようなモノではなくてな…ふむ。やろうと思えば、やれん事はないか？ 材料はこれらの調達出来るから安く付くだろうが…いや、やはり駄目だな始めれば此処に留まらなければならんし、私は動けなくなる…それに失敗すれば籠もっていた期間が丸々無駄になる」

エミヤさんは説明する内に一瞬だけ何かを閃いた風に見えたんだけど、すぐに何かに気付いたのか首を横に振ってしまう。

「それって、どれ程の日数が掛かるんですか？」

エミヤさんが贈ってくれた武器は正直、群を抜いている。
それに彼が着込んでいるモノのそれはこの地上を周り見ても、最強クラスなのは間違いない。もし、鎧か楯が出来るなら

「内容は”楯”だが、投影した存在を固定するのに約一週間、そして枯渴した使用魔力…精神力が快復するまでの2〜3日は満足に動かせん。その上、その一つを創るのに今の状態では成功率三割以下かそこらが関の山だ」

「それは…」

あまりに分が悪すぎる…と言うよりもあまり時間的余裕がない、今この状況で挙げる内容じゃなかった。

その後、話したことは旅の途中にもしも行う場合は時間的余裕がある時にとかを軽く決め事を相談し、今日どうするのかは、

「ま、今回はこの街の防具屋で装備整えるしかないさね」

ユニが結論を口にし、

「何、ザツと見て回っただけだが此処の防具はそう卑下するほど質は悪くない。とりあえずはこの辺りの魔物と対するだけの防御力は期待出来るさ」

エミヤさんが締めくくった。

「んじゃま、装備を整えに行きましょーか」

ユニが席を立つと両腕を上げてグツと伸びをし始める。

自分の気が済むまでずっと伸びをすると両肩を軽く揉みつつ肩を回しながら、あー重い重いとか何とか言ってるけども敢えて無視。

「なら…行くのは、道具屋と防具屋ぐらいでしょうか。エミヤさま、どちらを先に済ませましょうか？」

アーリアも無視した模様…ちょっとこめかみに青筋出てるけど。

「そのどちらもこのロマリアには幾つか店が出ていたな…とりあえず、先に店を見て回ろうか。粗方にしか見てなかったからな、その中で質の良さそうな所に目星をつけるとしよう」

エミヤさん、そんな二人の様子に関しては華麗に無視…流石です。

「じゃあ、二手に別れよ？ わたしとユニは先に道具屋で支度済ませてる間、アーリアはエミヤさんと防具屋の当たり付けてもらってから闘技場前で待ち合わせ。みんな合流してから防具屋に行く…ん、これで行こう！」

「ふむ…異論は特に無いな」

「え…？」

アーリアが面食らってる…まあ、驚くのもムリないけど。

「ほら、みんなで回ってたら時間掛かるし、それに道中で言ってたエミヤさんに色々教えるのはアーリアが自分でやるって言ってたじゃない」

「へ？ えっ、え！？」

どんどんキョドキョドし始めるアーリア。
もぉ…折角、お膳立てしてるのに。

「なあゝる。りょーかあい…んじゃま、アルス行こっか」

「え？ ええ？！」

ユニは理解した模様。

「じゃ、アーリア？ 行ってくるからね」

「えっ、ちよっ待ってっ？！」

「ふっふっふー、二人きりだからってエミヤン襲うにやよゝ？」
「お、襲っ、誰が襲うのよっ！？」

にやははぐつと笑うユニと一緒に宿屋を後にする。

後ろから色々と言ってる気がするけど、この中でエミヤさんと二人きりになってないのはアーリアだけだし、親友が彼に好意を向けてるのは丸分かりだ。

一番想ってるのに動かないなんてツライよね、アーリア？

厄介事（後書き）

うーん、何かヤッバイなあ…自分の事だけれどスゴく不安。

一応、頑張つていきます…が、前例持ちなだけに更新を期待なさ
つてくれる読者様をヤキモキさせるかもしれませんイヤ、させます
ね。

m
こんな筆者です…温かい眼で見守っていて下さいm（――；）

補給（前書き）

うはっ…私、遅っ（自嘲

約二ヶ月？ も、放っぱり出してしまった…マズい、マズいよ私。

補給

遠目から粗方でしか見定めていなかったもので解らなかったが、やはり刀剣の全盛期だからか現代にない存在感というもの感じられる。

「…ふむ。出来はどうあれ、アリアハンでも感じた事だがこの時代の生きた技術をこうして生で見れるとなると感慨深い」

感じていたのだが、

「ハイ、ソウデスネ」

問題が一つ。

「ほう…これは、中々の物だ。もし私が剣を送らなければ武器屋はここだったな」

「ハイ、ソウデスネ」

「…」

…あー、

「…大丈夫かね？」

「ハイ、ソウデスネ」

という風に全く以て、大丈夫そうには見えないアーリアが傍らを歩いている。

あれから宿屋の前で別れ、別行動に移ってからというもの、彼女はずっとこの調子なのだ。

今も顔は茹で上がった鮎のようであり、その歩く様は油切れを起こした発条式の玩具…こう、手と足を同時に出しながら器用に歩いている。

「…ふむ」

「ハイ、ソウデスネ」

いや、相槌にまで返事を返さなくてもいいのだが？

とりあえず、理由が定かではないがアーリアはヒドく緊張しているのは明らかである。

あと…

「あらあら」

「まあまあ」

だ、

「若いわねー」

「初々しいわ」

と言った、何故か周りを行き交う昼餉の材料を抱えた主婦の方々からの温かい視線が自分達に向けられているのが酷く不可解であり、

昔の光景に姉貴分がよく向けられていた視線が、今どうして自分に向けられているのかが謎だ。

そんな状況に僅かながら、その視線の理由を訊ねたい衝動に駆られる…

「若い時を思い出すわ…」

「あらやだ、わたし達もまだまだこれからよ？」

駆られる…

「それにしても相手は鈍そうねー」

「あの娘さんも見る限り奥手そうね」

駆られるのだが、戦場で培った？ 本능が警告するので行動に移らないようにする。

何処か、

手遅れな人を見るような目を向けられるに違いないと。

自分自身、どうしてそんな状況を描いたのかは知らん…何故か、そう幻視したのだから仕方がない。

まずは、兎にも角にも精神的に宜しくないこの状況を少しでも打開しなければならぬ。

「ふむ…アーリア？」

「ハイ、ソウデスネ」

小手調べに一度、名を呼んでみるもこちらを見ずに同じ言葉を繰り返してくるアーリア。

緊張の程度は判らないが、どの様に正気へと戻したもののか。

「アーリアは気付いているかな、会話が成り立っていないことに？」

「ハイ、ソウデスネ」

いや、これは成り立ってるか…では、

「実はな、この世界は私が知っている世界ではないのだよ。私は所謂、異世界から来た存在だ」

「ハイ、ソウデスネ」

ふむ、確認の返答もなく微妙に噛み合っていない上に流されたか。妥当なモノとしては、何かしら彼女にとっての衝撃的な事実を述べていけば正気に戻るか？

「…私が居た世界では比喩的な”魔王”は居ても実在はしていないんだ。ましてや結果的に”勇者”などと呼ばれるモノは居ても確固たる存在ではない」

「ハイ、ソウデスネ」

「…」

アーリア、それは自分が居る世界の全否定の肯定だぞ？

「……話は変わるが、私は”英霊”と言う存在だね。今は受肉して

いるが、ついこの間まではこの身は霊体だったのだよ」

「ハイ、ソウデスネ」

…いや、かなり衝撃的な事実を告げたハズなのだがな？

「…クッ、なるほど」

「ハイ、ソウデスネ」

いいだろう、受けて立つ…

「いくぞ、アリア？」

「ハイ、ソウデスネ」

緊張の重度具合は十分か？

「これは内緒なんだが、私は精霊ルビスとやらに君たちを手伝えと言われている」

「ハイ、ソウデスネ」

「恐らくだが、”世界”に干渉出来る存在ならある意味で彼女は私と同じ存在と言っていいだろうな」

「ハイ、ソウデスネ」

「フッ…とりあえず、君達への協力を惜しむつもりはない」

「ハイ、ソウデスネ」

「そして、”魔王バラモス”とやらだが。この世界に君臨しているらしいが、あれは只の尖兵だ。黒幕に”大魔王ゾーマ”とやらが居る…つまり、この世界に出回っているのはある意味でフェイクなのだよ」

「ハイ、ソウデスネ」

「…」

…くつ。

「私が本来の力を行使出来れば、事は早々の決着を見るのだが…ルビスの施した封印は頑丈だね」

「ハイ、ソウデスネ」

「…」

…、

「ま、まあ何だ？ 魔物を倒せば徐々に解除はされるそうだから、お互いに頑張ろう」

「ハイ、ソウデスネ」

…。

「ところで…手と足が同時に出てるのだが、歩き辛いのではないか

「？」

「ハイ、ソウデスネ」

「……………なんでさ」

「ハイ、ソウデスネ」

「……………くっ」

手強

「ハイ、ソウデスネ」

「……………はあ」

「ハイ、ソウデスネ」

思わぬ大苦戦に何とは無しに空を見上げながらため息をつく…ア
ーリアはそれにも律儀に相槌を打ったようだが。正直、さっきまで
の余裕は無い。

可笑しい。確かにこの身は戦場にて不敗だったはず…？

「…む？」

「ハイ、ソウデスネ」

ふと、思えば戦場から一步離れれば負けっぱなしだったような気が
した…いや、事実か。

確かに、頭の上がない人間は存在したな。

「主にあかいあくまとかあかいあくまとかあかいあくまとか」

「ハイ、ソウデスネ」

「……」

出来れば肯定しないでくれまいか？

この身は確かに剣……だが、心は硝子なのだよ。

「ハイ、ソウデスネ」

……いや、

「さっきのは口に出してもいないのだが……どうやら、私はまだアーリアには真に受け入られてないのか」

「ハイ、ソウデスネ………ふえ？」

一瞬、これも流されたかと思ったが……よし、どうやらこのようだ。

「いや、それは必要であり結構な事なのだよ。知り合って日も浅く、省みればあまり二人で話す機会もなかった」

「え……え、えと」

「そう。集団の中に一人はそれを気に掛けなければならない。確かに私は得体の知れない立場だから、他二人が居る時は良くても一人では何かと気を揉むのも致し方ない事だ」

「そ、そんな事はありません！　わたしはエミヤ様の事をそのつえと…」

「どうやら完全に現実へと帰還してきたらしい、いつもの彼女だ…
良いか悪いかは判らんが、これを機にこれから少しは緊張が解れる
と助かるのだが。」

「ふむ…どうやら私の思い違いだったか。いや、済まない事をした。
真に受け入れてなかったのは私自身らしい…好意的に私を受け入れ
てくれたというのに仇で返すような真似をしてしまった、許してほ
しい」

「い、いついいえっ！　気にしてませんからっ」

「いや、何か詫びねばと思う。何か御要望があれば何なりと聞こう」

「そそ、そんな片膝着かないで下さい頭を上げて下さいいいいい！」

私の行動にヒドく狼狽するアーリア…少し、気の毒に見えてきた。

「…そうか」

「ほっ…」

…ふむ。

「だが、いずれは何か形にして返す」

「へっ…」

今度は困惑、されど嬉しげな表情と紅潮した顔…その都度の反応が少し愛らしく感じてしまったのを何とか隠す。

何と言つか、自分をからかっていた周りの気持ちがいさ少し理解出来たような気がした。

あの頃のあかいあくまもこんな感じだったのかと思うと甚だ不本意だな。

…

「おいちゃんっだからそれは高いってーのっ！ 何処の世界にキメラのつばさ1束（9コ）で2000Gもするのさっ?!」

ユニの怒号？ が、店内に響く。

「店前でそんな声を荒らげないでくんねえかね、嬢ちゃんよお。言っとくが、そこらじゃウチの店が底値なんだぜ？」

「何処が?! つか、聖水も高い！ 1コで160なんて暴利もいイトコっ！ だから、まとめ買いすんだからこの端数は消すの！」

言って、ユニが算盤をパチパチ。

「イイヤヤそれこそ適正価格だ。聖水に関しちゃあ、この国に居る限り他と変わらんよ…嬢ちゃんよお、端数消すって3桁ントコのは端数言わんだろっがよお」

店主さんが呆れ気味にまた算盤をパチパチ。

「冗談！ 元居た所で買ったら、転売した聖水の差額だけで遊んで暮らせるっての！ って、ちよっ何ドサクサに2桁目のを繰り上げてんのさっ！？」

早打ちで算盤を更にパチパチ…因みにわたしはもう、最初に表示されてた値段を覚えてません。

「おー、おー、何とまあ罰当たりな娘つ子だなあ？ 悪い事は言わん、お布施代わりにウチで揃えてけ。イヤなら構わん。だが、ここから一步でも離れれば一品たりとも売らんからな」

と、そのお布施とやらを足した分を更にパチパチと…結果、

「つく、く・お・お・お・っ・！」

ユニが呻き声を漏らしてます。

わたしを余所に繰り広げられる白熱の舌戦と指弾き合戦は、どうやらユニの方が劣勢に追い込まれている…らしい？

らしいって、わたし断定出来ないし…だって、最初時から付いてけてませんもん。

「ユニいゝ…」

「心配ないない心配ないよお心配ないからねーアルス。ホントちよっつとばかり、この空気忘れちゃってただけだからさ？ さあ、さあさあさあつ、おいちゃんっ覚悟はいいっ！？ 本気になったよ火い着いたよ？ ケツの毛までぶち抜くよっ！？」

「哥っ…大きく出たなあ。こちら嬢ちゃんが生まれる前から店開いてんだ…老練を舐めんじゃねえよ」

唯ならぬ、今にも刃物出しかねない空気を醸し出しながら睨み合う両者はまるで互いが仇敵の如く…単に道具の代金を値切り合うだけなのにヒドく物騒ですよ。

「さあ嬢ちゃん、付いて来れるか？」

「そっちが付いて来やがれってのっ！」

…いや、ここってそんな凄いい見せ場的な科白を言う場面なのかな。イヤ違うよね、間違ってるよね？

と、思っても口には出さない…だって、口挟めないもんホント。

口からの言葉よりも早く二手先三手先の代金を指でパチパチ弾いてるし。

何かもう、更に過熱する値切り合いを背景にわたしは現実逃避を兼ねて店外の風景、道行く人々を見やる事にした。

「…」

視界に映る食材片手に話す主婦達、走り回る子供達、楽しげに語り合う人達や睦まじく寄り添う男女ら。

所変われば人変わる。

ここの住民は誰一人として自分に期待の眼差しを回さない、奇異の視線も回してこない…負の視線も。

本当に、ここでのわたしはただの、アルス。

城から何の伝播もない……だから、”勇者”の肩書きを持った者がこのロマリアに入国したのも全く知らされてない。

今の自分からは心の重りが軽く感じられる。

そんな、初めての感覚。

「嗚呼……」

このままで”父を探す旅”を続けられれば、どんなに良

「でええいつちきしょうめいつ、持ってけ泥棒っ！」

「だっしやああつ、穫ったどおーっ！！」

「……っ？」

突然の張り上げ声にビクツとして見やるとユニがやり遂げた充実感をかもしながら両手を挙げて勝ち鬨を上げている。

経過は分からないけど、とりあえずは多少は安く買えたらしい……店のおじさんが年甲斐もなく涙目なようなのは見間違いだろっ。

「くううう……っ、まさかこの道40年の儂が半分も生きてない嬢ちゃんに競り負けるとはあっ」

「はっはっはー、うちが本気でしたらザッとこんなもんよ！ んじや、キメラのつばさ5コに聖水9コ、んでから薬草に毒消し草諸々9コずつと。代金は2250Gでことで、おいちゃんあんがとねー」

「ああーっあ、今日はもう店仕舞いだあクソ……はああ」

「まっ、氣い落とさない落とさない」

意気揚々とばかりに道具類の入った袋を持ち上げるユニを見上げていると立ち上がる素振りもないのに気付いて小首を傾いだ。

「？ どつたの？」

くるくると表情豊かなユニ…いつも通りの彼女。

「…………ほら、早く出ないとおいちゃんが店仕舞い出来ないよ？」

少し訝しんでたけど動かないわたしに何か感じ、察して、暖かい笑みで以て空いていた手を差し伸べてくれた。

「…うん」

差し伸べてくれた手を握り返すとその場から立ち上がった。

傍目に見上げ、見下ろす立場が変わったけど中身は変わらずそのまま。

「ふふっ…うちと一つしか変わらないのにアルスは甘えん坊さんだなあ」

「えへへ…ごめん」

自分でも悪い癖だとは思ってる…んだけど治す気はないし、多分治らない。

”あんな過去”や”アリアハンの自分の現状”があって、こんな風に心許した人への甘え癖が出来てしまったのはいつだろう？

…嗚呼、そうだ。

アーリアが傷付だらけだったわたしを抱き締めてくれて、両親の反対を押し切って冒険者になってパーティーを組んでくれた日から、

「ま、いーけどねー。ユニお姉さんの両隣の片方はアルスの特等席だからさ」

ユニがわたしの立場を知っても尚、変わらずにいつも通りに接してくれて、明け透けに心配だからとパーティーを組んでくれた日からだ。

「じゃあ、もう片方はアーリア？」

更に半歩だけ、ユニの方へと寄り添う。

こんなんじゃないダメな事は解ってる…でも、もう手遅れなんだよね。

「フツ…残念、もう片方はエミヤンでした」

「わああ…それ、絶対に言わないでよ？ アーリア荒れちゃうし」

だって、わたしはもう

「エミヤさんも困らせちゃうよ」

彼にも甘えてしまってるから。

補給（後書き）

あー…、所謂アレですよ。私は、

飽きっぽいようです。（筆が止まるとその作品から逃げたくなる。

そして、

気も多すぎるようです。（違うモノに目移りし、頭ん中がそれだらけに。

うはっ…果てしなく救い難い！ ホント、度し難いよ私っ！？
嗚呼、誰か…ボスケテ、大急ぎで。

反省

復活したアーリアと店を回り、目星を付けてからは他愛ない会話をしながら待ち合わせ場所である闘技場へと向かった。

他愛ない会話…会話と一口に言っではいるが、その中で彼女が心此処にあらずという状態が何度も起きたので生返事や会話が噛み合わない等々、色々と苦労があったが割愛しておくしよう。

紆余曲折あったが目的地に着けばアルス、ユニの姿があった。

「おおーい！ こっちこっちー」

「アーリアー、エミヤさん」

どうやら早い段階で自分達を待っているという状況だったよう

「つか、案外お早い合流で。いやはや何処かでシッポリしてるかと思ったのにーん」

こちらを見やりながら何を思ったか、ユニが自分の身をその手に抱いて何やらクネクネと身悶え始め、

「し、しししぼっぱ…シッポリなんかするわけないでしょおおっ！」「ぎゃあああつまたアンコ出るアンコ出るううっ！？」

宿屋の再現…思わず感心してしまう程の俊敏さで接近したアーリアによる、アイアンクローで絞られるユニ。

とりあえず、悲鳴を上げるのを眉間を押さえながら聞き流す…ど

うにも、通りに行く傍目からはさぞかし、大変賑やかな面々だと捉えられている事だろうな。

「エミヤさん、そちらの方はどうでしたか？」

そんな穏やか？　な事を考えているとアルスが訊ねてきた。彼女もこの手の状況を流すのも少々手慣れてきた感がある…まあ、良い傾向、だろうと思う。

「目処は付けてきた。とりあえず、二人が落ち着いたところで向かおうと思っではいるんだが…」

アルスにそう答えながら、二人の方を見やってみるが、

「もおお…大袈裟よ、ユニ。まだ半分も力入れてないのに」
「のおおお…っ…！」

これではどれくらいで落ち着くかは判らんな。

「あははっ…ユニもどうなるか分かってるのにやるんですよねー」

そう、楽しげに笑う。

その笑みは年相応のあどけなさが見えた。

「…？　どうかしましたか、エミヤさん？」

それを眺めているとアルスは小首を傾ぎ、こちらを見やってきた。その姿が…

「…いや、」

摩耗した中でも未だ色褪せない、

”…？ 士郎、どうかされたのですか？”

あの戦いの中に確かに在った、

「何でもないさ」

数少ない、

”「？ そうですか」”

その穏やかな日常で”彼女”が見せたそれと重なっ

「ってあああつ！？ アーリアあつ、ユニがだらーんってなってるからそれ以上だめええつ！！」

こちらを見やっていたアルスの視線がふと逸れた瞬間、ギョツとしたかと思えばそのままアーリア達の方へと走り出すのを見送る。その後ろ姿から視線を外すと徐に中空を見やり、目蓋を閉じて

「…何を考えてる。未熟者、女々しいぞ戯けめ」

そんな自分を一通り罵った。

「…”視”たのは軽率だったか」

ルイーダの宿で起き抜けに彼女の魂を”視”た、あの時の自分を滅したい衝動に駆られる。が、それはもう後の祭りでしかなく過去は変えられない。

「はぁ…」

久しく着きもしなかった溜め息を吐き、目蓋を開くと…

「あ、ああ危うく何か、お花畑の向こうでうちに手を振ってる人達んトコに行くところだったよ！」

「良かった、回復が間に合って…アリア、今回はちょっとヒドいよ？」

「何だよ、ユニが悪い！ わたしは悪くない！」

「でも、本当に《ホイミ》必要だったんだからね？」

「そーだそーだぁ」

「うつ…うつ、うつーっ…わたし悪くないもんっ！ 元はと言えば言われる状況作ったアルスが悪い、ユニが悪い！！」

「ええっ？ ユニは兎も角、わたしが何で悪くなるのっ？！」

「そーだそー…あるえー？ 何でうちだけが悪者扱いになるのさ。

アルス？ アルスだって、それいいかもって言ったよね？ 言ったじゃんかっ！！」

「いい”かも”ってちゃんと言った！」

「…」

「言ってんじゃん!」

「言ってない!」

「クッ」

「「っ?」!」

「そう、そうなの……クッククッ」

「あ、あーりあ?」

「クククッ」

「あーりあさ〜ん?」

「そうなの、そうなのね……心の準備が出来てなくてあたふたする羽目になったのは結局……クッ、クックククッハッ」

「「ビクッ!」」

「あゝるゝすゝ……」

「ひっ」

「ゆゝにゝ……?」

「ひっ、ひいひい!?! だ、ただだから、”かも”だよ。”かも”って言っただ、断定してない! わたし無実!」

「ちよっ、こらっうちに”この”アリア押し付けるなああ一緒に仕置きされなさいってのおお!」

いつの間にやらアルスも加えた三つ巴の状況と相成りそうな言い争いを止めるべく、その歩を進める…デフォルメされた虎のストラップが柄に付いた竹刀をその片手に投影して。

…

「うう…」

ひりひりする頭を撫でつけながら、

「さて…少しは頭が冷えたかな？」

木剣とは違う、何だか木のような木とは違うような？ そんな節くれだつた剣を手に腕を組むエミヤさんの前でわたし達三人は座らされてます…何か、足揃えて膝折りに！

「この座り方は道に直は痛いです」

履物の布越しに道の砂利が足に当たって地味に痛い。

「これは”正座”と言う。格式ばった所での礼儀作法の一つでもある。が、主に反省させる時に使われるモノでもある」

は、反省ですか？

「ナルホド。た、確かに…何だかこう、身に積まされる感、があります…？」

闘技場の出入り口の真ん前で往来の脇なのも合わさってるし、道行く人がチラチラ見てくるからもう、色々ときついですよつ。

アーリアなんか座らされて早々、かなり辛いみたいでずっとブルブルしてるし、

「あの…何で、うちだけ更に膝の上に買った荷物？」

ユニなんか道具で買った物を抱えさせられてて、ヒリヒリする頭を撫でつけられないという状態…聖水9個とかそこそこ入ってたよね、アレ。

「今回の主犯だからな」

「……エミヤンがその特殊な嗜好を嫌がるうちに無理矢理押し付けて何か悦に入ってる件について」

「ほう…これはこれは。まだまだ、お灸の一つをご所望なのかね？」

何か途轍もないモノを背負ってエミヤさんが木剣みたいなのをユニに向けてる。

「い…いつ、いいいいいいえええつ！ そんなあまたまたご冗談を…うちはもう、山より高あく、海よりも深あく反省してます。勿論ですとも、はあいつ！」

剣先を向けられてビクツとしてたユニは途端に変に真面目な表情

と共にその口にし、何処からか何かこう、”キリッ”という音まで聞こえてきたけど…何だったんだろ？

「ふむ、その割りには反省の色があまり見えん……とりあえず砂時計を追加だ」

特にわたし達には無かった砂時計を何処からともなく取り出さされ、ユニの前へ。

しかも、砂が落ちたままの状態…そこからひっくり返さないのがその容赦の無さを窺えさせます。

「う、うう…うわぁあぁ…んっエミヤんがうちをイジめるぅーっ！
」

ユニ、少し涙目。

こんな感じでユニの頭にはわたしやアーリアとは違って、単瘤が二つにひっくり返されていない砂時計が一つ…でも、

「…んだよ。…つとした、茶目っ…じゃんブツブツ」

まだ余裕そうだなあ。

「空を見るがいい、陽はもう頂点を過ぎているだろうっ」

エミヤさんの指の先を追い、手を翳して太陽を見る。
確かに陽の光は少し傾いてた…あー、

「そう、ですね…」

エミヤさんの仰りたい事、よく分かります。

うん、フォロー出来ないや。

「ああ、そうだ。そして、本来ならばもう防具屋へと赴き、既に用も済ませられたはずだ」

「なら、今からでも遅くない！　こんな事してないでさ、さっさと行こうよぉー？」

「はっはっはっ…どの口が言うか」

何とか説得を試みようとしたユニの前に更なる砂時計追加するエミヤさん…しかも、最初のよりもちょっと大き目のをスッゴクイイ笑顔と共に。

ああ、ユニがどんどん墓穴を掘ってく…そうしてロマリアの街の中心、闘技場の前に、

「エミヤんの鬼っ、鬼畜っ、まさに外道おおー！」

と…まあ、こんなユニの悲鳴が轟いたとき。

その少し後でわたしとアーリアが罰を解かれたんだけど、

「あ、あ…あっ、あし、足がっ」

「あっアーリア大丈夫っひぁあああ…」

足が痺れて満足に動けなくても、特に症状がキツイアーリアを支えようとした所で態勢を崩した彼女がその拍子に、同じく痺れてるわたしの足に縋っちゃってまあ、

「あっ、あ、あ、アルスっ、ごめんなさいい」

「気、気にしなひぁあああ…」

何度も思いつき声を上げちゃいましたよ。
いやもう…

”正座”恐るべし？ うん。

完全に腰砕けなっちゃって。

跡形も残滓もなく、文句なしに痺れが治まるまでずっと、アーリアと抱きかかえ合っていました。

そして、

「さて、ユニはまだそのままだぞ」

その言葉を始めにユニの小さい砂時計はひっくり返され、それが落ちてから二つ目のがひっくり返されていく。

サラサラサラと落ちていく細やかな砂…見守るわたし達も何だかもどかしいのに、”正座”したままのユニはどう見えるか。

「あ、あのお…そろそろ足の感覚がー？」

「そうか…なら、砂が落ちきるまで下手に動かさない事だ。爪先など少しでも動かせば…砂が落ちきるまでのもどかしさのあまり、号泣する羽目になるぞ」

「わぁーお……ね、そろそろ本格的に泣いていい？」

そうして三つ目の砂時計。

往来での鬼畜外道呼ばわりに一つ目の倍の大きさのを追加され、それが落ちる中でのそんなやり取り。

それを肩を寄せて抱きかかえ合ってたアーリアがエミヤさんに構ってもらえるユニを羨ましげに見てて、

「いいなあ…」

と、呟いたりしたのが聞こえた。が、ユニとエミヤさんの状況が状況なだけにその感想は違う…と、あなたの親友を自負するわたしはそう心の中で思います。

口には出しません…だって、また收拾つかなくなったらヤだもん。

「ちょっ…あの、足がつ、うちの足がまるで他人様のみたいななんだけどっ!？」

砂が落ちきり、正座から解放されたユニは全く自分通りに動かない足に驚愕し始める。

うんうん…分かる、分かるよユニ。

「何、しばらくすれば感覚は戻る」

「そ、そう。ま…まあ、これがずっと続くわけ…つつ…!!」
「??？」

「そうそう、言い忘れていたな…」正座”は長く座れば座る程、足の感覚が麻痺していく。それに比例して足の感覚が戻った時、感じる痺れも度合いも…」

エミヤさん…

「あ、あ…あ、ああ…」

「強くなる」

それ、今言っ?

とりあえず、ユニのあまりの硬直具合に駆け寄って触れようとしたら、

「い、いい今、ふっ、触えちゃあめっ!!」

と呂律の回ってない言葉で止められました。

「う、くっ…ふ」

そんな、

「あ、う…うつ…っ」

プルプルと身悶えて、

「つぶ、うつ…うつ、ううー…」

まるで産まれたての子鹿とか子馬のように痺れが伝わる感覚に声を我慢する、かなり貴重なユニの姿。

「あ、ああアルス、ちょっ手、いや腕貸して腰支えて」

「うつ、うつ…う、うん分かった…」

少し、我に返るのに時間が掛かってしまい、誤魔化す為に慌てたのがいけなかった。
支える拍子に、

「あ」

爪先がユニの足に当たった…瞬間、

「っほ…、ほあああああっっ！！！？？？」

絶叫。

「わあああああっっ、ごめんっ…、ごめんなさいごめんなさいいいい！！」

そんな耳元での大絶叫に、元々少し混乱したわたしは色々と慌ててしまい、

「うんっうんっ！ 分かった分かったから痛くない痺れてヒリヒリピリピリするだけだからだからそこ触っちゃあああーっっっっっっっっっっっ！！」

自分でどういった症状かを体験したというのにもう、

「っひい、ひぎい…っ」

触りまくりました。

「ひいあっ、うっ、うっっぐっ…」

そんな、触っちゃダメなのに痺れてる足をさわったり擦ったりと。

「…は、っはあ…っ！？」

そして我に返って、その事に気付いた時には、

「…あ、あつ…あ、ひ…あひつ…」

ユニはなんだかもう、涙とか何だかでボロボロの有り様に。

「あひ、あ…し…だみえ、っぴり、ぴり…ひ、りひり……いあ、
もおいあらお…もお、せいざはやらお」

「え、えと…よ、よしよし?」

何かすんごく幼くなっちゃった。

いや、言動だけでなく、雰囲気まで幼くなってむせび泣くユニを
落ち着かせる為、彼女の頭を優しく撫で撫でする事にする。

「ひつく…う、つく…」

「え、えと…」

こんなユニの状態に、どうしようとアーリアやエミヤさんの方を
見るが…

「流石に、あそこまでの仕打ちは私には出来ん…」

何やら深刻そうにしてて…いや、あれは思わずですから。

「ア、アルスには全く悪気はないんですよ? 本当に。ですが、そ
の、何と言いますか…少し、天然と言いましようか」

アーリアは判っててくれてる…でも、誰が天然だよ??

「まあ見ればそれは判る。もし、あれが打算的にやったものなら…
…少々、アルスへの見方が変わるな」

うつっ…ヒドイ。

二人して好き勝手に言うのを耳にしつつ、ユニを背中をポンポンとしながら頭を撫でてる。

「う…」

彼女はもう、何かこう、ギョツと子供が抱き付くみたいにわたしに抱き締めてきてます。

そんな姿に何だかちよつと胸が高鳴ったような気がしたのは内緒…いや、何かの間違いに違いない。

… 違いない、よね？

反省（後書き）

ストック終了。

筆もストップ。

…もしかしたら、完結まで書き上げてから投稿しないとダメなのか？ 私は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9859h/>

異世界の勇者、異世界の英霊

2010年10月8日22時03分発行